

原著論文

「本を読む母親」達は誰と読んでいたのか：
「創作グループ」の長野県 PTA 母親文庫からの離脱をめぐって

Who Were the Partners of “Reading Mothers”?:
An Analysis of the Decision of the Writing Circle’s Withdrawal
from PTA Mothers Book Club in Nagano Prefecture

山 崎 沙 織
Saori YAMAZAKI

Résumé

Purpose: The purpose of this research is to answer the following questions: (1) When and how did PTA Mothers Book Club change its goal from the promotion of their own reading and writing activities to children’s reading promotion?, (2) How did librarians and teachers perceive club members’ positions and abilities?, and (3) How were they involved in the activities?

Methods: First, we analyzed the records of the management board of the Club. Second, we examined essays written by a librarian who assisted the writing circle in the Club. Third, we compared the content of essays written by an elementary school teacher who recommended Club members to focus on children’s reading promotion with those written by the librarian.

Results: (1) In the 1950s and 1960s members of the Club engaged mainly in the reading and writing for themselves, but in the 1970s they began to focus on children’s reading promotion, and then this became the main activity after the 1980s. (2) The librarian who assisted the writing circle in the Club regarded the Club members as the ones who tried to gain new viewpoints through the activities. In contrast, the teacher who promoted parent-child reading activities expected them to behave play the role of ‘mothers’. (3) The librarian shared the motivation of reading with the Club members and gave them advice. On the other hand, the teacher regarded himself as a book-adviser for children and mothers, the Club members, as the best book-advisers for their own children; thus, he encouraged them to accomplish their role.

「本を読む母親」達は誰と読んでいたのか

- I. はじめに
 - A. 研究の背景と目的
 - B. 本論の問いと研究方法
 - C. 先行研究の検討
 - D. 研究対象資料の説明
- II. 長野県 PTA 母親文庫における「読むこと」「書くこと」
 - A. 本の流通組織から本を読む母親達の連絡組織へ
 - B. 読むことから書くこと、話すこと、そして子どもへの読書推進へ
 - C. 子どもへの読書推進志向の高まり
 - D. 母親文庫の活動志向の分水嶺としての 1970 年代
- III. 「新しい自己に目ざめる」ための読書
 - A. 「創作グループ」の概要
 - B. 「図書館員」による「新しい自己に目ざめる」ために読む母親の発見
 - C. 想像力で自己の体験を超える機会としての読書会
 - D. 生活を再認識するための「創作」活動
 - E. 「創作」活動がもたらした母親であることを相対化する視点
- IV. 母親文庫における親子読書志向の発芽と創作グループの離脱
 - A. 母親文庫における親子読書志向の発芽
 - B. 我が子への読書推進における「教師以上の適者」としての母親
- V. おわりに
 - A. 本論の知見
 - B. 今後の課題

I. はじめに

A. 研究の背景と目的

「本を読む母親」という言葉は今日、「我が子に本を読み聞かせる母親」というイメージを想起させる場合が多い。2001 年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行されると相前後して乳幼児健診等で読み聞かせが奨励されるようになったことや¹⁾、2004 年までに児童・生徒の約 9 割が読み聞かせをしてもらった経験をもつ²⁾ようになったことを鑑みれば、「本を読む母親」はすなわち「我が子に本を読み聞かせる母親」であるという連想はごく自然なものであろう。ここにおいては、「本を読む母親」と「その母親に本を読んでもらう子ども」は分かちがたく結びついている。

しかし、第 2 次大戦後の日本において「本を読む母親」という言葉は「我が子に本を読み聞かせ

る母親」ないし「子どもと一緒に読書する母親」を指すためにのみ用いられてきた訳ではない。その言葉によって文字通り母親による母親自身のための読書活動が示される場合もあった。このことは、日本の戦後の読書運動の代表例のひとつとして図書館史で度々言及される長野県 PTA 母親文庫（以下、「母親文庫」。活動期間 1950 年～2014 年）の原点が、信州大学長野師範学校長野附属小学校（以下「附属小」。1951 年に「信州大学教育学部附属長野小学校」に改称。）の学校図書館整備の際に児童の母親達が自分達も本を読みたいと県立図書館に掛け合って、「母親用に」まとまった冊数の本を貸し出してもらった³⁾ことにあるという事実からも分かる。ちなみに、母親達は学校図書館整備のために集めた資金を附属小に届ける際、児童用の本だけでなく自分達の読む本も備えて貸し出して欲しいと要望したが、学校側の回答は児童の教育で手一杯で母親の読書活動に割く人

的物的資源の余裕はないというものであった。そのため、回答を受けた母親達は県立図書館から本を調達すると共に、児童を介して本を回覧する際などにも“なるべく先生の手を煩わさないように”⁴⁾[p. 11] 心がけたという。母親文庫は少なくとも初期においては文字通り母親のための文庫だったのであり⁵⁾、運営面では学校よりも公共図書館との連携が強い活動だったと言える。

附属小での試みは盛況を博し、県内他地域の母親達も附属小をモデルにした活動を志すようになった。県立図書館もこうした動きに全面的に協力し、1951年の上伊那配本所の設置を皮切りとして1961年までに県内の全郡への配本所設置を完了した⁶⁾。また、1956年以降、各配本所には“会員の自主的な運営組織”⁷⁾[p. 170]としての配本所運営委員会が續々と発足し、文集の発行、講演会や研究会の開催等の各種事業を行うようになった⁶⁾⁷⁾。1959年にはその時点での全ての配本所が委員会によって運営されるようになり⁸⁾、同年には全配本所の運営委員会の連合組織である長野県PTA母親文庫運営協議会が立ち上がった。そして1960年代に入ると母親文庫は最盛期を迎え、同年代の参加者は年平均約6万人を記録した⁹⁾。また、60年代には大半の配本所で運営委員会編集の文集が発行されるようになり¹⁰⁾、「読むこと」に「書くこと」と「話し合い」を加えた“三つの柱”⁷⁾[p. 177]が母親文庫の活動の要として定着した。

母親文庫の活動の主眼を母親自身が読み書き話し合うことに置いていたのは、母親文庫の参加者達だけではない。文庫に本を提供する県立図書館もまた、母親達を“読書の領域におけるピラミッドの底辺”³⁾[p. 22]と位置づけ、彼女らの求めに応じつつ県下全域に県立図書館の本を流通させていく¹¹⁾ことを第2次世界大戦後の民主化された図書館活動の象徴と見なしていた¹²⁾。

このような中で、母親文庫10周年を記念して1959年に行われた「本を読む母親の全国大会」は円地文子、花森安治、村岡花子等11名の講師と母親達が語り合うという文字通り「本を読む母親」の集いであった。

だが、年を経るにつれ母親文庫は子どもへの読書推進への志向を強めると共に学校や小学校教師との連携を積極的に模索するようになり、2003年には組織の名称を「長野県PTA母親文庫」から「長野県PTA親子読書推進の会」へと変更した¹³⁾。母親文庫は2014年3月に活動の幕を下ろしたが、その前年の県大会の討議テーマは「みんなでやってみよう！絵本ではじまる学校応援団」であった。母親文庫と学校や教師が連携して親子読書推進に当たることは、文庫が当初、“なるべく先生の手を煩わさないように”⁴⁾[p. 11]運営されていたことと比較すると大きな変化である。

本論で注目する「上田市PTA母親文庫創作グループ」(以下、「創作グループ」。1971年に「本と母の会創作グループ」に改称。)は、母親文庫最盛期の1960年代(1963年)に、書く勉強をしたい¹⁴⁾という上田市PTA母親文庫会員の声から生まれた小集団である。創作グループのメンバーの「書く勉強をしたい」という声は、母親文庫における集団読書や話し合いの中から“しだいに自分を見つめ、自分のまわりの人々や、風物を見つめ、日々の生活を考えて、それを文章にあらわしたいと云う願いが生れ”¹⁵⁾[p. 1]たり、“PTA新聞や母親文庫の機関紙など、おかあさん方が原稿を書く機会が多くなっているから、それらに多少まともなものが書けるように”¹⁶⁾[p. 48]なりたいたいという気持ちが生じたりしていた中で上がったものだったと説明している。

創作グループの主な参加者は上田市PTA母親文庫の会員であった¹⁷⁾が、県立図書館史は、創作グループの活動を県内の母親文庫に共通する“広い読書活動の基盤の上に着実に活動を深める”⁷⁾[p. 196]あり方の好事例として紹介している。また、読書活動の深化を志す小集団は、上田市PTA母親文庫のみならず各地の母親文庫内に結成された¹⁸⁾が、そうした小集団のうち全県組織である長野県PTA母親文庫運営協議会が作成した年表¹⁹⁾にグループ名が残されているのは創作グループのみである。このように扱われている創作グループの活動を検討することは母親文庫の全県的な動きにおける母親自身の読み書き活動への

志向を考察するためにも有意義だと思われる。

創作グループの会員達は、助言者に上田市立図書館の図書館員平野勝重を頼み、母親自身による読み書きを極めていった。だが、同グループは1971年に活動母体の上田市PTA母親文庫から“創作グループがある為に母親文庫の会員が減る”²⁰⁾ [p.218] との声を受け、母親文庫からの離脱を余儀なくされている。

この離脱劇は、上田市PTA母親文庫内のローカルな出来事というだけではなく、長野県PTA母親文庫全体に及ぶ活動内容の変化、すなわち、母親自身の読み書きを志向し必要な際は図書館(員)に支援を求める²¹⁾ということから、いわゆる母親として我が子と共に読むことを志向し学校(教師)との連携を模索するということへの変化を特徴づける一事例であるように思われる。しかし、同グループがなぜ離脱要請を受けるに至ったかについては、創作グループに関する先行研究²²⁾によっても当事者達によっても曖昧なままにされてきた。また、これまでの母親文庫に関する研究⁶⁾²³⁾²⁴⁾は1950年代から1960年代を中心に検討するものが多く、1970年代以降の母親文庫の活動志向の変化についてはほとんど検討されてきていない²⁵⁾。

そこで本論は、母親文庫における全県的な活動志向の変化、とりわけ創作グループが母親文庫から離脱した1970年代前後における活動志向の変化を明らかにすることを目指す。また、その変化において母親達の立場や能力がどのように位置づけ直されたのか、そして、図書館員や小学校教師が文庫の活動志向や母親達の位置づけ(の変化)とどのように関わっていたのかを、創作グループの母親文庫からの離脱を具体例として明らかにすることを目指す。

とはいえ、母親文庫の全県的な活動志向の変化に伴う母親の立場・能力の位置づけの変化や文庫への図書館員・小学校教師の関わり方は、本論で取り上げる人々、すなわち、創作グループのメンバーや創作グループの助言者の図書館員(平野勝重)、また、創作グループが母親文庫から離脱する時期に長野県PTA母親文庫の活動の主眼を子

どもへの読書推進に置くべきと主張した小学校教師(小口明)の言動によって包括しうるものではないだろう。母親文庫の活動状況は県下各郡の配本所ごとに異なる部分があり、また、平野や小口は母親文庫を支援した図書館員や小学校教師の中でもとりわけ精力的に活動した人物だったと思われるためである。しかし既に述べた通り、創作グループは1960年代の母親文庫に共通する母親自身の読み書きを深めようとする志向の好事例とされている。また、小学校教師の小口は、母親文庫の全県団体である長野県PTA母親文庫運営協議会が開催した研修・地区公開講座で「読み聞かせ」をテーマに講師を務めてもいる²⁶⁾。これらのことから、本論の行う事例の分析は、母親文庫の活動志向の変化に伴う重要な点のいくつかを明らかにしうるものと考えられる。

B. 本論の問いと研究方法

本稿は、以下の3つの問いに答えるための検討を行う。①特に1970年代前後の時期において、母親文庫の活動の主眼はどのように変化してきたのだろうか。②母親が自身のために読み書きすることや子どもへの読書推進を行うことが「母親」文庫の活動として「自然な」ものと見なされる際、母親の立場や能力はどのように位置づけられていたのだろうか。そして、③そのように位置づけられる母親達の活動に図書館員ないし小学校教師はどのように関わっていたのだろうか。

検討は、具体的には次のように進める。まず、次章(第II章)では、母親文庫活動の主眼がどのように変化してきたかの概観を得るため、1954年から2013年までの母親文庫の全県大会の討議テーマの内容を中心とした通時的検討を行う。次に、第III章では、図書館員からの助言を受けつつ母親自身の読み書きを極めた小集団である「上田市PTA母親文庫創作グループ」に焦点化し、同グループの助言者を務めた図書館員、平野勝重が母親達の能力や立場をどのように位置づけ、そうした母親達といかに関わろうと試みていたのか、そして、創作グループでの読み書きの経験が母親達にどのような変化をもたらしたかを検討す

る。更に第IV章では、創作グループが母体である上田市PTA 母親文庫からの離脱を余儀なくされた時期が、母親文庫の全体的な活動志向の変化、すなわち、母親自身が読み書き話す活動を志向することから母親による子どもへの読書推進活動を志向することへの活動志向の変化が始まった時期と重なっていることに着目する。そして、その変化を促した小学校教師、小口明が母親文庫の参加者達の立場や能力をどのように位置づけよう(位置づけ直そう)としていたのかを創作グループの助言者の図書館員のそれと対照させながら検討する。終章(第V章)では結論と今後の課題を述べる。

なお、本論は母親文庫の活動の変化に関して上記の通り質的な分析を試みるが、その変化に関係すると思われる量的なデータについてここで少し触れておく。母親文庫の参加者達は主に小学校のPTAに所属する母親達であり²⁷⁾、1950年から1990年までの長野県の平均出生年齢から逆算すると彼女達が小学校のPTAで活動する期間の年齢は30歳代半ば頃から40歳を少し過ぎる頃までであったと推測される²⁸⁾。大まかに言えば、母親文庫の参加者達は長野県在住の30歳代の女性であったと言えよう。そして、長野県在住の30歳代の女性の教育経験や子育て期の就業状況には世代によって大きな差がある。

まずは教育経験について見てみる。第2次世界大戦後のいわゆる新教育について定めた学校教育基本法が施行されたのは1947年4月1日であり、1947年度に小学6年生だった人が35歳になるのは1970年度、1947年度に小学1年生だった人が35歳になるのは1975年度のことである。このことから、ごく大まかに言えば1970年度より前は、母親文庫の参加者達の大半が小学校(尋常小学校)期間の全てを戦前の学制の中で過ごした人々だったのに対し、1970年度を境に新教育下での小学校経験を持つ人々が増え始め、1975年度までには参加者の大半が新教育下で小学校時代を過ごした人々になったと推測できる。また、参加者達の教育年数にも大きな差がある。母親文庫が創始された1950年頃に35歳であった女性達

の世代(1920年代末に尋常小学校を卒業し6カ年の義務教育期間を修了)の高等女学校への進学率は6%に満たなかった²⁹⁾。(高等小学校への進学率は50%程度²⁹⁾。)それに対し、1970年頃に35歳であった女性達の世代(1950年頃に中学校を卒業し9カ年の義務教育期間を修了)の高等学校等への進学率は約50パーセントに達している³⁰⁾。更に言えば、1985年頃に35歳であった女性達の世代(1965年頃に中学校を卒業)になると高等学校への進学率は約70パーセントに及ぶ³⁰⁾。新教育下での教育経験の有無と教育年数の観点から、1970年代以前と以後の母親文庫の参加者達の間には看過できない差異があったと言える。

次に、母親文庫の参加者達の就業状況を検討する。1955年から1990年の国勢調査³¹⁾³²⁾³³⁾³⁴⁾³⁵⁾³⁶⁾³⁷⁾³⁸⁾によって長野県の30歳代の女性の就労率を算出すると、70年代前半に大きな変化が見られる。1955年から1970年までの間、30歳代の女性の就労率は70パーセント前後で推移していたが1975年に62.9パーセントまで急激に低下する³⁹⁾。その後1980年になると就労率は65.6パーセントまで回復するものの、1990年に至るまで66パーセントを超えることはない³⁹⁾。ここからは、1955年から1990年までの間でいわゆる専業主婦化⁴⁰⁾が最も進行したのは1970年代前半であったことが分かる。また、国勢調査³¹⁾³²⁾³³⁾³⁴⁾³⁵⁾³⁶⁾³⁷⁾³⁸⁾の結果からは、1970年代前半が就労率のみならず、どの産業に従事するかについてもターニングポイントとなる期間であったことが見えてくる。1955年から1970年までは、長野県の30歳代の女性が最も多く従事する産業は農業であったのに対し、1975年になると製造業への従事者数が農業のそれを上回っている。

このような量的データは母親文庫の活動内容の変化の一端を読み解くことを可能にしてくれる。自身が戦後の新教育を受けた経験をもち就学機会に恵まれた世代であるほど、また、専業主婦イメージと母親イメージが重なり合う世代であるほど、母親文庫に求めるものが自身の読書機会よりも子どもの(子どもと一緒に)読書機会になっていくであろうことは想像に難くない。また、1960

年代までの母親文庫の参加者達に（時に子どもの世話をさしおいてでも）自分達のための「読書」活動を行う根拠と原動力を与えていたのは、家（イエ）での農作業や家事に追われる自分達は新教育を受ける子供や家（イエ）の外で働く人々と比べて時代に「遅れ」がちであり、その「遅れ」を「読書」によって取り戻さなくてはならないという自己認識であった⁴¹⁾。母親文庫の参加者達が家（イエ）の外で就労する機会が増えれば、自分達の読書に専心することの根拠や原動力は薄れていくだろう。これらの見解からも、母親文庫の活動志向の変化の理由や、母親自身の読み書き活動を極めた創作グループが1971年に母親文庫からの離脱を余儀なくされた理由を推測することが出来るように思われる。

しかし、母親文庫の活動志向の変化やそれに関連した創作グループ離脱の理由は、量的データによってのみ説明し得るものではない。学習意欲の高い母親文庫の参加者達に図書資料の提供以上の関わりを求められた時、図書館員は自分と参加者達をどのような者と見なすことによって参加者の求めに応じたのだろうか。また、子ども（の教育）への関わりを深めつつある世代の母親文庫の参加者達に親子読書を勧めた小学校教師は、教師だけではなく母親である参加者達もが子どもへの読書推進に関わるべきとの主張に説得力を持たせるため、自分と参加者達の果たすべき役割をどのように割り振っていたのだろうか。こうした問いに答えつつ、母親自身の読書活動や子どもへの読書推進活動がどのようにして「母親」文庫のなすべき活動として成り立っていたかの詳細を明らかにするためには、量的データを参照するにとどまらず、当事者達の言葉に目を向ける必要がある。本論が、当事者達が語り書き残したものの分析を試みるのは、このためである。

このような試みをする本論の意義は以下の2点である。まず1点目は、戦後の日本における母親の読書活動において、母親自身の読み書きと母親による子どもへの読書推進がどのように連続的であるか、あるいは、非連続的であるかの一端を明らかにしうることである。次に2点目は、とりわ

け母親に対する社会教育の機関としての公共図書館と教育者としての図書館員の可能性と限界について一考察を与えうることである。

C. 先行研究の検討

本論が先行研究として検討すべき研究分野は、①公共図書館の社会教育機能についての研究、②女性の社会教育についての研究、③母親による子どもへの読書推進についての研究である。

まず、①公共図書館の社会教育機能に関する研究について述べる。日本の公共図書館の社会教育機能については、20世紀初頭の「通俗図書館」の設置が奨励された時代から戦後の「市民の図書館」の時代に至るまで各時代の図書館関係者によって論じられてきており、それぞれの論で主張される図書館や図書館員が社会教育のために果たすべき役割には多様性がある。しかし、先行研究⁴²⁾は、それらの論を教化・教導機関としての図書館（「文化的な」または、国策に合致する資料を提供しその資料の「正しい」読み方を人々に教えることを責務とする図書館）から「市民の図書館」（市民の資料要求に応じた資料を提供し、資料利用者の資料解釈には介入しないことをモットーとする図書館）へという流れの下に整理する傾向がある。そのため、「市民の図書館」として描かれる図書館像と重なる部分の少ない論は一括りに傍流の図書館論とされがちであり、それらに対する十分な検討はなされてきていない。

本論が焦点化する創作グループは、家（イエ）での家事子育てや農作業に追われる女性達が日常生活からは得られない知識を求めて集い、図書館員の積極的な助言を受けながら読み書き活動を成立させた小集団である。助言者の平野勝重は「市民の図書館」に結実した資料提供中心主義に納得せず、図書館員は人々からの求めがあれば文章解釈の提示をも含む読書会等での助言活動を積極的に行うべきと唱えた、自称“異色の”図書館員⁴³⁾だった。その平野は1969年、「市民の図書館」のサービスモデルを示した前川恒雄と公共図書館の社会教育機能について論争を行っている。

この論争において前川⁴⁴⁾は、公共図書館の本

質的機能は資料の提供であり、社会教育的図書館活動（本を読まない市民を読書に近づける活動や市民の読書の内容を高める活動）の基本もまた“図書の提供”⁴⁴⁾[p.12]（“質の高い図書を市民の身近かにおき、要求された図書を必ず貸すこと”⁴⁴⁾[p.12]）にあるとした。このような図書の提供は“供給が需要を生む”という正攻法⁴⁴⁾[p.12]であり、提供の結果は“市民の読書水準を高め驚くべき量の図書館利用となって表れてくる”⁴⁴⁾[p.12]というのが前川の主張であった。

これに対して平野は、“前川氏は読書普及と読書の向上の問題をきわめて楽観的に考えており、しかも“資料の提供”という図書館の機能を過大評価している”⁴⁵⁾[p.6]と批判した。平野は、図書館利用者の増加は既に本を読む習慣を持っていた人が本の入手経路を変更したことによる可能性が高いため、利用者の増加と読書率の上昇（読まない、ないしは読めない状態にある人が読むようになったこと）を同一視することはできず、また、市民が「質の高い図書」（前川の例示によれば純文学作品や古典）を手にとれる環境を作り出すことと読書の内容を高めることを同一視することもできないと述べた。

平野はこのように述べる根拠として、図書館員として母親文庫の参加者達に関わってきた経験をひきつつ、主婦等読書を思うようにできない状態にある人において読書を阻む要件は読みたい本が身近にないことだけではなく、嫁の読書を嫌う姑の存在や過酷な労働状態等多岐に渡ることを指摘した。更に平野は、そうした人々に読書の習慣を形成させるものは自分と同じような制約の下で読書を試みる仲間との連帯であり、連帯の中で読書を深めるための小集団（読書会や書くことの勉強会等）を形成した人々が求めているのは（「質の高い図書」を手にとることというよりも）“自分の生活を再認識”⁴⁵⁾[p.5]することにつながる読み書きや話し合いの体験だとも指摘した。

そして平野は、このような“読書により学びたい”という主婦たちの知的要求にこたえ”⁴⁵⁾[p.6]るべく、主婦達の置かれた生活状況の理解に努め、また、主婦達からの求めがある場合には図書

の内容の解説や主婦達の読書感想への意見を含む助言活動を行うことこそが図書館の社会教育的機能を果たすことだと主張した。

だが、このような平野の主張⁴⁵⁾⁴⁶⁾⁴⁷⁾は、先行研究において資料提供中心主義への反論として取り上げられることがあっても平野の実際の助言活動と照らし合わせながら検討されることはほとんどなかった⁴²⁾。本論は平野が図書館（員）のあるべき姿をどのように論じたかを検討するだけでなく、平野の描いた図書館（員）像を平野の実際の助言活動や、平野の助言活動が被助言者に与えた影響と関連させながら分析する。この試みにより、社会教育機関としての図書館や図書館員の今後に関するなんらかの示唆をもたらすことができると考える。

第2次大戦後に「市民の図書館」が達成したものの大きさは周知の通りである。しかし、今日の図書館には商業出版物の貸し出しのみならず、学業を終えた後の「学び直し」による知識の更新⁴⁸⁾や、外国人留学生、外国人労働者の受け入れに伴う多文化共生⁴⁹⁾の拠点としての役割も求められるようになってきている。また、図書館員の職務も、地域資料、外国資料、デジタル資料等を含む多様な資料を探索、特定化し、時には自らも資料の作成を行いながら発信していくことにまで及ぶようになってきている⁵⁰⁾。そしてこのような中で「市民の図書館」像をそのまま今日の図書館のあるべき姿として設定することは、図書館と図書館員の可能性をかえって狭めてしまうという指摘がある⁵⁰⁾⁵¹⁾。そうだとすれば、平野の主張を通して図書館（員）が資料の提供を行うだけで自己教育を志す市民のリクエストを満たし得るのか、また、何をもって図書館員が利用者の資料解釈に介入しないと言えるのかを再考することにも一定の意義があるように思われる。

次に、②女性の社会教育に関する研究について述べる。志熊敦子によれば、第2次大戦後、女性を対象とする社会教育は、“近代化に遅れた婦人”⁵²⁾[p.12]に対して“社会性を啓蒙”⁵²⁾[p.13]し、“自覚ある参政権の行使”⁵²⁾[p.13]を促すための施策から始まった。しかし、当初社会教育の

受け手であった女性達は婦人学級等の小集団学習の経験を経て1960年頃からは自ら学ぶ姿勢を見せ始める⁵²⁾。これに伴い、社会教育の内容は近代化への「遅れ」を解消するためのものから経済成長と共に生じたライフスタイルの変化への対応を考え、女性や家庭、地域のあり方を問い直すものへ移っていったという⁵²⁾。

こうした社会教育の場では、女性達が自らの暮らしに密着したものごとを書き、それをもとに話し合うという試みが数多くなされていた⁵³⁾。これらの試みは女性達にとって自分の暮らしを見つめ直す機会となるだけでなく、それまでにない振る舞い方、すなわち、大勢の前で自分の考えを述べる、考えたことを順序立てて明確に示すといった振る舞い方等を身につける機会ともなったという⁵⁴⁾。

これらの研究は、本論が研究対象とする創作グループの活動の社会的背景や参加者達の経験がどのようなものであったかを考察する上で重要な示唆を与えてくれる。しかし、これらの研究においては、学習集団の助言者の職業的アイデンティティと学習集団の活動内容がどのように関連していたかについての考察には十分な紙幅が割かれておらず、指導者のあり方が学習集団の可能性と限界に相当の影響を及ぼすことが指摘される⁵⁵⁾に留まっている。これにはおそらく、先行研究が研究対象とした学習集団の指導者の多くが公民館の主事や学校教師、文化人等、学習集団を「指導」することが「自然」な人々であり、学習集団の指導と自分の職業的立場について改めて言及した資料をほとんど残していないことが影響していると考えられる。一方、本研究が研究対象とする創作グループの助言者は図書館員であり、時に図書館界の潮流に抗いつつあくまで図書館員として、文章解釈の提示をも含む助言活動を行うことを試んでいた。そのため、平野は自身の助言実践について多くの文章を残している。これらの文章を分析することで、図書館員の関わる学習集団の可能性と限界についての一事例を示すのみならず、学習集団の指導者の職業的アイデンティティと学習集団のあり方について的一端を明らかにすること

ができると考える。

なお、①、②を架橋する研究として、山梨あや⁵⁶⁾のものがある。山梨は、1900年代から1960年代の日本における読書と社会教育のあり方について通史的に明らかにする中で、戦後、図書館員や公民館職員を助言者とする読書会に参加した女性達が“既存のものの見方や考え方を組み変えていく、あるいは「ずらして」批判的に考える潜在的な「力」”⁵⁶⁾ [p. 279] を得たことを指摘している。また、山梨は、長野県の松本市立図書館を中心として読書会活動を推進、組織化しようと試みた図書館員（小笠原忠統）が“「図書館員が読書会にタッチする場合、それはあくまで助言者としてであり、積極的な指導意識を持つことはさげなければならない」ことを充分認識しつつも「現実にはその意欲のない人達を一つの読書グループに組織化し、それが永続発達し得るまでの相当永い期間、組織に於いても運営に於いても、図書館員が積極的に進出しなければ何としても不読者層と手を握ることは出来ませんでした」という矛盾に悩んでいた”⁵⁶⁾ [p. 220] ことにも触れている。しかし、山梨の研究では小笠原を悩ませた「矛盾」が掘り下げられることはない。本論は山梨の示した知見を引継ぎつつ、図書館員を助言者として行われた戦後の読書活動において、助言者が図書館員であることと被助言者達が求められた活動の成果がどのように関わっているかの詳細を明らかにすることを目指す。

最後に③母親による子どもへの読書推進に関する研究について述べる。これらの研究⁵⁷⁾は、親子読書会や地域文庫、家庭文庫を研究対象とし、それらの活動の歴史や活動内容等について詳細な検討を行っている。だが、これらの研究において、そうした活動に関わる人々の子どもへの読書推進の志向は自明の前提とされてきている。これらの研究が子どもへの読書推進を目的に結成されたグループやその中心人物にフォーカスしていることを鑑みれば、それは当然のことであろう。だが、本論冒頭で指摘した通り、戦後の日本における母親達の読書活動においては子どもへの読書推進のみが志向されてきた訳ではない。とすれば、

結成当初は母親のための読み書き集団であることを志向していた母親文庫が今日的な意味での母親文庫になっていく過程を検討し、志向が変化していく時期に子どもへの読書推進活動を行うことの正当性がどのように主張されたかを検討することには意義があると思われる。

D. 研究対象資料の説明

本論で分析する主なデータは以下のものである。まず、母親文庫の全県的な動きに関しては、『長野県図書館協会会報』（1950年～2005年刊行分）及び、母親文庫の全県組織である「長野県PTA母親文庫運営協議会」（2003年に「長野県PTA親子読書推進の会運営委員会」に改称）が発行した『長野県図書館大会「母親の読書部会」記録集』（1970年～1998年刊行分）、『長野県PTA母親文庫のあゆみ』（1999年～2003年刊行分）、『あゆみ』（2004年～2014年刊行分）を分析する。次に、創作グループと同グループの助言者の図書館員（平野勝重）については、平野の著作物と、平野へのインタビュー（筆者が2015年10月3日に上田市情報プラザにおいて実施）のデータ、及び創作グループの文集を分析する。そして、PTA母親文庫における親子読書推進を唱えた小学校教師（小口明）については、小口の著作物、その結成当初から小口が参加していた「日本子どもの本研究会」の会誌『子どもの本棚』（1970年～1975年刊行分）、及び小口が創設に関わった親子読書会関係者からの働きかけを受け親子読書を試みた母親文庫の参加者の体験記を分析する。

分析に当たっては、母親文庫や創作グループ、図書館員や小学校教師がどのような活動を行っていたかを明らかにするだけでなく、そうした活動に関わる人々の立場や能力がどのように位置づけられ、その位置づけとそれぞれの活動がどのように結びついていたのかについても明らかにすることを試みる。

II. 長野県PTA母親文庫における「読むこと」「書くこと」

A. 本の流通組織から本を読む母親達の連絡組織へ

長野県PTA母親文庫は、本を読みたいという母親達の要求を受け県立図書館の“少ない本を多数の人に読んでもら”⁷⁾[p.168] えるよう、1950年に組織された。県立図書館から母親文庫に団体貸し出しされた本は、県下全郡に設置（設置完了は1961年⁶⁾）された配本所⁵⁸⁾に送られ、その地域の利用団体（小学校や婦人団体等）の代表者によって団体に持ち帰られた後、団体内の回覧グループ（4～5人で一組）で回し読みされた³⁾。世話役以外の参加者が家（イエ）にいながら“毎月1冊の本を手にとる”³⁾ [p.113] ことを可能にするこの方式は、「新教育を受ける子どもよりも遅れがち」とであると自認する母親達⁴¹⁾に大いに歓迎された。

このようにして母親のための本の流通組織として始まった母親文庫は、時を経るにつれ、参加者自らの運営する、本を読む母親の連絡組織としての機能を備えるようになる。各地の母親文庫の参加者達は1954年以降、年に1度開催される「長野県図書館大会」に一同に会して交流をもつようになった⁵⁹⁾。また冒頭に述べた通り、1959年までには既存の全ての各配本所に“会員の自主的な運営組織”⁷⁾[p.170] としての配本所運営委員会が発足し、同年には運営委員会の連合組織である長野県PTA母親文庫運営協議会が立ち上がっている。

そして母親文庫が本を読む母親の連絡組織として機能するようになるのと並行して、文庫の活動は狭義の読書以外にも広がった。配本所運営委員会の手によって、文集の発行、講演会や研究会の開催等の各種事業が行われるようになったのである⁶⁾⁷⁾。冒頭で述べた通り、1960年代には文集が大半の配本所で発行されるようになると共に¹⁰⁾、「読むこと」に「書くこと」と「話し合い」を加えた“三つの柱”⁷⁾[p.177] が母親文庫の活動の要として定着した。

それでは、狭義の読書を越えた広がりをもつようになった母親文庫の活動志向はどのように変化していったのだろうか。その変遷について1954年から2013年までの長野県図書館大会で母親文庫が運営した部会の協議テーマ（付録1）を軸に検討を行うことで明らかにする。

B. 読むことから書くこと、話すこと、そして子どもへの読書推進へ

長野県図書館大会で母親文庫が運営した部会の協議テーマを抽出し分類した。『長野県図書館協会会報』（1950年～2005年発行分）、「長野県PTA母親文庫運営協議会」が発行した『長野県図書館大会「母親の読書部会」記録集』（1970年～1998年発行分）、「長野県PTA母親文庫のあゆみ』（1999年～2003年発行分）、「あゆみ』（2004年～2014年発行分）から協議テーマを抽出した（付録1）。本文で特定テーマに言及する際には、そのテーマの後ろにそれが話し合われた部会の開催年を丸カッコ内の数字（1954年のテーマであれば「54」）で示した。さらに、テーマ変遷の概略を得るためにテーマの分類を試み、以下の分類を見出した。分類は、大分類をアルファベットで、小分類をアルファベットと数字の組み合わせで示した。

- A: 母親文庫全体に関するテーマ
- B: 母親文庫の読書全体に関するテーマ
- C: 母親文庫の組織・運営に関するテーマ
 - C-1: 組織・運営全体
 - C-2: 配本の経路・方法
 - C-3: 配本内容
 - C-4: 他の組織（図書館／学校／市区町村／婦人会）と母親文庫の関係
 - C-5: その他
- D: 母親への読書の普及に関するテーマ
 - D-1: 読書の普及全体
 - D-2: 全会員への文庫の趣旨等の周知
 - D-3: 読書への理解の少ない家族（姑等）と共に読書できるようにする方法
 - D-4: 会員の読書意欲の維持・向上
 - D-5: 仕事や家事、育児と読書の両立

- D-6: その他
- E: 母親の読書を深める活動に関するテーマ
 - E-1: 読書を深める活動全体
 - E-2: 読後感想
 - E-3: 書くこと
 - E-4: 読書会
 - E-5: その他
- F: 子どもへの読書推進に関するテーマ
 - F-1: （母親と）子どもの読書
 - F-2: 読み聞かせ
 - F-3: その他
- G: テレビと読書に関するテーマ
- H: その他
- I: 合同部会
 - I-1: PTA母親文庫部会、公共図書館、公民館図書館及び一般合同部会
 - I-2: 公共図書館、小中学校、母親の合同部会
 - I-3: 学校図書館、公共図書館、母親文庫の合同部会

なお、分類A～Hに含まれるのは母親文庫が単独で開催した部会内のテーマでありテーマの内容によって分類しているが、分類Iに含まれるのは母親文庫が他の組織と合同で開催した部会での協議テーマであり、どの組織と合同で協議したかで小分類に分けている。また、複数の分類にまたがるテーマについては便宜上、最も関係性が高いと思われた分類に含めている。

分類したテーマを年代別に並べたものが付録1である。ここから見えてくるのは、母親文庫が、母親達自身が読み、書き、話し合う場として立ち上がり、徐々に母親による子どもへの読書推進へと力点を移していく有様である。

まず、1950年代の協議テーマの特徴としては、「C: 母親文庫の組織・運営に関するテーマ」と、「D: 母親への読書の普及に関するテーマ」が協議される頻度が高かったことが挙げられる。自分達の手で母親文庫を運営する（より良い「C-2: 配本の経路・方法」, 「C-3: 配本内容」を模索することと、母親文庫会員になっても読めない状態にある人々に対応する（「D-3: 読書への理解の少ない家族（姑等）と共に読書できるようにす

る方法」を伝え合い、「D-4: 会員の読書意欲の維持・向上」を図り、「D-5: 仕事や家事、育児と読書の両立」を模索することが50年代の関心事だったと言える。1950年代は、読書を求める母親の声に応じて県立図書館が県下各郡に配本所を設置(1951年～61年)し⁶⁾、母親自身の手による配本所運営委員会が立ち上がっていく(1954年～69年)⁶⁾時期である。協議テーマもこうした動きの中で設定されたものと思われる。そして1950年代末になると、「D: 母親への読書の普及に関するテーマ」だけではなく、「E: 母親の読書を深める活動に関するテーマ」(「E-2: 読後感想」や「E-4: 読書会」のあり方等)が協議されるようになっており、母親文庫における読書活動が読むことのみならず話すこと、書くことへと広がっていった様子が伺える。

続く1960年代の協議テーマの特徴としては、まず、「E: 母親の読書を深める活動に関するテーマ」が高い頻度で協議されるようになったことが挙げられる。読書を深めるための具体的な活動の中でも協議された回数が多いのは「E-3: 書くこと」(初めて協議の組上に上がったのは1961年)であり、これは、1960年代に大半の配本所で文集が発行されるようになったことと呼応した特徴であろう。1960年代の協議テーマのもうひとつの特徴としては、1963年に「G: テレビと読書に関するテーマ」が初めて協議題となったことが挙げられる。このテーマは1960年代及び70年代に集中的に協議されている。

また、ここまで見て来た1950年代、60年代の協議テーマに共通する特徴としては、テーマが母親自身が読み、書き、話すことに焦点化しており、いわゆる母親として子供への読書推進を行うことについてのテーマ(「F: 子どもへの読書推進に関するテーマ」)がほとんど見られないということがある。Fに分類可能なテーマとしては、「子供の教育と母親文庫との関係をどのようにしたらよいか(‘58)」「母親と子どもの読書(‘63)」「母親が読書をしたために子どもによい影響を与えた例はありませんか(‘64)」「母親の読書が子どもの教育のためにどのように役立っています

か(‘65)」「親子読書—その進め方—(‘69)」があるものの、1958年、64年、65年のテーマから伺えるのは、まず母親自身が読書を行うことが子供の教育に良い影響を与えたり役に立ったりするというアイデアであり、協議の眼目は子供の読書よりも母親の読書に置かれているように見える。このことを加味すると、母親文庫で子供への読書推進に直結するテーマが初めて協議されたのは、「親子読書—その進め方—」が議題に含まれた1969年だと言えるのではないだろうか。

1970年代になると、「F: 子供への読書推進に関するテーマ」(「F-1: (母親と)子どもの読書」)が、「D: 母親への読書の普及に関するテーマ」(「D-5: 仕事や家事、育児と読書の両立」)、「E: 母親の読書を深める活動に関するテーマ」(「E-3: 書くこと」, 「E-4: 読書会」)および「G: テレビと読書に関するテーマ」と共に毎年協議されるようになる。母親自身が読み書き話す活動を志向する協議テーマと、母親による子どもへの読書推進を志向する協議テーマが並び立っていることが1970年代の特徴と言えよう。なお、詳細は第IV章で検討するが、1970年代には子どもへの読書推進に熱心な小学校教師から“子ども不在の母親文庫運動はややおかしいように思います(傍点は原文のママ)”⁶⁰⁾[p. 15]との意見が出されるようになった。また、“創作グループがある為に母親文庫の会員が減る”²⁰⁾[p. 218]との声を受けて同グループが母体である上田市PTA母親文庫からの離脱を余儀なくされたのは1971年のことである。

C. 子どもへの読書推進志向の高まり

協議テーマのほとんどが母親自身が読み書き話すことを志向するものだった1950～60年代、母親自身が読み書き話す活動を志向する協議テーマと、母親による子供への読書推進を志向する協議テーマが並び立った1960年代末～70年代を経て、1980年代以降は母親による子どもへの読書推進を志向する協議テーマの比重が増してくる。

1980年代の協議テーマの特徴としてはまず、70年代からの「F-1: (母親と)子どもの読書」

に加えて、1985年からは「F-2: 読み聞かせ」が討議テーマとして定着したことが挙げられる。また、1984年に「I-2: 公共図書館, 小中学校, 母親の合同部会」が開催され公共図書館長と学校教師, 母親文庫関係者が一堂に会して“三者協議で文庫のよい発展の糸口を見つけ”⁶¹⁾[p. 42]ようと試みていることにも注目すべきである。これ以前の長野県図書館大会においても母親文庫はPTA役員との研究分科会を設けたり(1965年, 66年に設けている。「C-4: 他の組織と母親文庫の関係」として分類), 「I-1: PTA 母親文庫部会, 公共図書館, 公民館図書館及び一般合同部会」(1968年)に参加したりして母親文庫外の人や組織との連携を模索している。しかし, 学校関係者と母親文庫関係者が長野県図書館大会で文庫について直接協議する機会をもったのはこれが初めてのことであった。

“文庫のよい発展の糸口を見つけ”⁶¹⁾[p. 42] するための三者協議がこの時期に開かれた背景としては, 1980年代を迎える頃までに市町村立図書館の整備が進み, 母親文庫の活動の基礎となってきた県立図書館からの配本の意義が薄れてきたことがある⁶²⁾。三者協議では母親文庫の活動に子ども達への読書推進の活動を組み入れるという方向性が全ての関係者の支持を得た⁶¹⁾。翌1985年以降県大会での協議テーマに「F-2: 読み聞かせ」が含まれるようになったことは既に指摘したが, これは前年の三者協議の結果を反映したためと推測される。また, 長野県PTA 母親文庫運営協議会は1970年以降毎年, 会員を対象とした「研修・地区公開講座」を開催しているが1986年には研修・地区公開講座のテーマも「読み聞かせ」となっている。付録2は, 研修・地区公開講座の開催年とテーマを一覧にしたものだが, 1986年より前のテーマは「会議の持ち方」「書くこと」「集団読書」と母親自身が読み書き話す活動に志向したものであるのに対し, 1986年の「読み聞かせ」以降は「読み聞かせ」や「童話」「昔話」等, 子どもへの読書推進を志向するものが主流となっている。なお, 1986年～88年の「研修・地区公開講座」で「読み聞かせ」の講師を務めた小

口明は, 1970年代に“子ども不在の母親文庫運動(傍点は原文のママ)”⁶⁰⁾[p. 15]を批判した小学校教師その人であった。

その後の1990年代, 2000年代になると, 子どもへの読書推進志向の高まりが協議テーマにより明確に表れてくる。1990年代には, 「F-1: (母親と)子どもの読書」, 「F-2: 読み聞かせ」, に加えて, 「I-3: 学校図書館, 公共図書館, 母親文庫の合同部会」が毎年開催されるようになり, 母親文庫関係者が公共図書館関係者のみならず学校図書館関係者と協議する機会が恒常的に設けられるようになった。そして, 2000年代を迎え, 母親文庫が「親子読書推進の会」へと改称(2003)する頃になると, 「E-3: 書くこと」や「E-4: 読書会」等, 母親自身が読み書き話すことに志向する協議テーマが設けられる頻度が目に見えて減る一方, 「F: 子どもへの読書推進に関するテーマ」は充実し, 「F-1: (母親と)子どもの読書」, 「F-2: 読み聞かせ」はもちろん, それら以外の子供への読書推進に関するテーマ(ブックトークや読書ボランティア等。「F-3: その他」として分類)についての協議も行われるようになるのである。

D. 母親文庫の活動志向の分水嶺としての1970年代

このように見てくると, 母親文庫の活動志向が母親自身が読み書き話す活動から母親による子どもへの読書推進活動へと変化していく分水嶺は「(親と)子どもの読書」が県大会の討議テーマに含められた1970年頃にあると言えよう。それでは, 1963年から1971年までの間母親文庫で活動し母親自身の読み書きを極めた「創作グループ」において, 母親文庫の参加者達はどのような存在と見なされていたのだろうか。さらに, そのように見なされることは母親自身が読書することや図書館員が創作グループで助言を行うこととどのように結びついていたのだろうか。また, “創作グループがある為に母親文庫の会員が減る”²⁰⁾[p. 218]とのクレームを受け, 創作グループが母親文庫からの離脱を余儀なくされた1971年頃, そのクレームはどのように成立し得たのだろうか

か。そして、1970年に“子ども不在の母親文庫運動はややおかしように思います（傍点は原文のママ）”⁶⁰ [p. 15] と述べた小学校教師がその考え方を母親文庫に定着させるための説得を試みた時、教師は参加者達の立場や能力をどのように位置づけ（直し）たのだろうか。これらのことを次章以降で検討する。

III. 「新しい自己に目ざめる」ための読書

A. 「創作グループ」の概要

既に述べた通り、創作グループは、書く勉強を望む上田市PTA母親文庫会員によって1963年に結成された小集団であり、上田市立図書館（上田市・小県郡PTA母親文庫配本所兼）に勤務していた“異色の”図書館員⁴³、平野勝重が助言者を務めた。グループの活動の中心は、各自の生活に根差した詩や文章を「創作」⁶³し、合評することであったが、作品づくりの参考となる表現の方法を学ぶため、平野が文学作品や作家、文章の書き方について講じたり会員の作品の講評を行ったりすることもあった⁶⁴。グループの学習会は毎月1回行われ、40名程度の会員が集まっていた⁷。グループは2000年代まで400回以上の例会を重ね、46冊の文集をまとめた。また、文集の他にもグループのメンバーが自分史等をまとめた本が（自費）出版されている。こうした作品は草の根の女性の生き方を知る貴重な資料となっている。

B. 「図書館員」による「新しい自己に目ざめる」ために読む母親の発見

創作グループの助言者を務めた図書館員、平野は創作グループにとって欠かせない人物であり、グループのメンバーはその功績について“とおり一遍の謝意を超えた表現”²² [p. 149] で記している。その平野がPTA母親文庫の参加者達の立場や能力、ニーズをどのようなものとみなしていたかを最初に検討する。この検討は、平野が図書館員の助言活動への慎重論をおして創作グループでの助言活動を続けた訳を理解することにもつながるだろう。

平野と母親文庫の参加者達の出会いは、文部省の図書館員養成所を卒業した後防衛大学図書館に勤務していた平野が故郷である上田市に戻り、市立図書館に着任して間もない1961年1月の雪の降りしきる日のことだったという。平野は、“この雪の日のことは今もあざやかに思い出す。それは私にとって異様な光景でもあった。”⁶⁶ [p. 9] と述べ、その光景について繰返し語っている⁶⁶⁶⁷。その日は上田市・小県郡PTA母親文庫の配本日で、前回配本された2, 30冊もの本をフロシキやリュックに詰めた役員の母親達が本を交換しにバスで1時間以上もかかる山村から集まってきたという。“まっ白に雪をかぶって”⁶⁶ [p. 9] やってきたのにも関わらず、“明るく、騒然たる話し声と、爆発するような笑声”⁶⁷ [p. 46] を響かせた母親達は200人あまり。平野達の前で“フロシキの結び目を解く母親の手は赤くふくらみ、指はアカギレで割れていた”⁶⁷ [p. 46] が、包みの隙間から吹き込んだ雪が本の背についていることに気づくやその手で素早く払い落す草草からは“本を大事に扱おうとする母親の心”⁶⁷ [p. 46] が感じられたという。

このようにして、母親文庫の参加者達の“波のようなエネルギーと自分とを対決させなければならなくなった”⁶⁶ [p. 9] 平野は、その求めに応じて、テキスト（図書）の内容についての説明や解説をしたり、参加者達の読後感想に意見を述べたりするようになる⁴⁵。とはいえ平野の助言活動は最初からスムーズな滑り出しであった訳ではないようだ。当初、文学仲間と話す感覚で話したところ、参加者達の反応は“何を言っているのか分からない”、“どこが分からないって全部分からない”、“もっと普通の言葉で面白かった、悲しかった、って言えませんか”、だったという⁴³。その一方で平野は、母親文庫の参加者達が“労働力としての嫁から貴重な時間をうばうものとして読書を敵視する年寄りたちの中で育児や家事や農作業だけの毎日を過ごしてきた”⁴⁵ [p. 2] ことや、“姑たちが居なくなった今でも、近所の人が来ると読んでいた本を座ブトンの下にかくすクセが抜けない”⁴⁵ [p. 2] かったり、夫から“又本なんか読ん

でいる。そんな暇があったらつぎ物でもしたらどうだ⁶⁸⁾[p. 36]と嫌味を言われながら読んでいたりすることを知っていった。

興味深いのは、平野が自分と参加者達との関係性を語る際、周囲の人々の目を気にしつつ“生活に何の役にも立たない”⁶⁸⁾[p. 37]と見なされがちな読書に励もうとする参加者達と、文学青年や図書館員として培ってきた経験が通用しないことに衝撃を受けながらも参加者達と読み書き話し合うことを続ける中で“図書館員としての自己を発見し、変革し”⁶⁸⁾[p. 37]ようと試みるようになった平野自身とを重ね合わせながら語っている⁶⁸⁾ことである。この語りの中で、平野は、自分と母親文庫の参加者達を同じ欲求、すなわち、“読むこと、書くことを通して、生活を見つめ、新しい自己に目ざめ”⁶⁸⁾[p. 39]ていこうとする欲求をもって読書に向かう者として位置づけている。しかも、その欲求は平野が参加者達との交流を持つ前から明確に自覚していたものではなく、平野が参加者達の異様なまでのエネルギーに採まれる中で見出したものとしている。平野が、図書館界の潮流に反してでも助言活動続ける原動力となったのは、自分と参加者達の欲求についてのこのような認識だったと考えられる。

平野は、本を求める母親に本を提供するということにとどまらず、彼女らとの交流を通して彼女らが本を求めることの根底にある欲求を見出し、その欲求に読書活動への助言を通して応えようと試みる。この姿勢は、資料提供に重きを置く「市民の図書館」の姿勢とも、母親文庫の重点を「読書を深める」ことよりも、「読書をすすめる」こと（読書普及運動であること）に置こうとしていた県立図書館の姿勢⁶⁹⁾⁷⁰⁾とも異なるものである。しかし、平野は自身の試みこそが図書館員が“民衆の中へ真の意味では行って行”⁶⁶⁾[p. 10]くことだと主張している。

また、平野は母親文庫の参加者達を“新しい自己に目ざめ”⁶⁸⁾[p. 39]るべく読み書きする者として位置づけるが、この「母親」の活動に子どもの存在は必須ではない。詳細は次節以降で検討するが、“新しい自己に目ざめ”⁶⁸⁾[p. 39]ようとす

る母親に必要なのは、自分の日常を相対化する視点をもたらすような文章と、そうした視点から文章を読むことを可能にする助言者や母親仲間であった。

平野が見出した欲求が母親文庫の参加者達にどの程度共有されていたのか、そのような欲求のみが母親文庫の参加者達を「読書」へと駆り立てていたのか⁴¹⁾、また、図書館が（潜在的）利用者の欲求をどの程度まで掘り下げて把握すべきなのか（把握しうるのか）については更なる検討が必要である。しかしその検討は別稿に譲り、本論では母親文庫の参加者達と共に“読むこと、書くことを通して、生活を見つめ、新しい自己に目ざめ”⁶⁸⁾[p. 39]ようとする平野が、「読むこと、書くこと」について具体的にどのような助言を行っていたのか、そして、被助言者達のどのような振る舞いが読み書きの成果と見なされていたのかを検討していく。

C. 想像力で自己の体験を超える機会としての読書会

平野は自分と母親文庫の参加者達を同じ欲求によって読み書きへ駆り立てられる者として等置する一方、その欲求を満たす術を身に付けているかの程度は自分と参加者達で異なると見なしていた。平野は母親文庫の参加者達の視野が“昆虫が地を這うような”⁷¹⁾[p. 48]ものであり、“体験や経験を超えるものについては、それをそのまま、よけて通り過ぎて行く”⁷¹⁾[p. 48]傾向があると指摘する。平野によれば、そのような狭い視野のまま読み書きをしても“読むこと、書くことを通して、生活を見つめ、新しい自己に目ざめ”⁶⁸⁾[p. 39]ることはできない。そのため平野は、自分が助言を行うことによって読書会が“日常のなかで気づかぬ自己を発見するような”⁷¹⁾[p. 47]場として機能し、そこでの経験を通して母親文庫の参加者達が“想像力によって他者の体験を主体化していく読者”⁷¹⁾[p. 48]となることを目指した⁷²⁾。

その平野は、読書会等で平野自身の文章解釈を示すのは、“作品中の人物を理解する時の想像

力の働き”⁷¹⁾[p. 48]を示すためだと主張する。ただし平野は、“私の解釈はおそらく正しくはないだろう。主婦たち(筆者注:読書会の参加者たち)の意見のとおりでよいのかもしれない”⁷¹⁾[p. 48]と述べ、自分の文章解釈が誤っている可能性を率直に認めてもいる⁷⁴⁾。その上で、なお文章解釈を示すことの意義を、読書会の参加者達のそれと異なる自分の文章解釈が、読書会の参加者達に実生活では得られない視点からものごとを見る機会を与えることに求めているのである。

自分の助言の意義をこのように主張することは、平野の助言活動を戦前戦中の読書指導に当たった図書館員の活動とは異なるものとして提示することにもなっている。戦前戦中の図書館の読書指導について分析した山梨⁵⁶⁾によれば、当時の図書館がモデルとした読書会の特徴は、助言者である図書館員の文章解釈を被助言者に沁み込ませ、最終的に被助言者が自ら国の役に立つ人間にふさわしい解釈を行えるようにすることにあったという⁷⁵⁾。これに対して平野が助言者を務める読書会は、参加者達の“新しい自己に目ざめ”⁶⁸⁾[p. 39]ようとする欲求に基づくものとされ、そこで示される文章解釈は参加者達に実生活での体験・経験からは得られない視野の広がりをもたらすこと、参加者達を特定の何者かとして形作るものではないとされる。敢えて言うならば平野は、参加者達に自分が何者であるかを常に相対化する者であることを求めているのである。

D. 生活を再認識するための「創作」活動

1963年に創作グループが設立されると平野は同グループでも助言者を務めるようになった。創作グループは参加者達自らが書くことを志向する小集団であったが、平野にとっては読むことも書くことも“新しい自己に目ざめ”⁶⁸⁾[p. 39]するための手段ということで分かちがたく結びついていた⁷⁶⁾。

グループ名を「創作」グループとすることを主張したのは平野であり、平野は「創作」に“生活をありのままに記すのではなく、意識的に、虚構(フィクション)を用いることにより、生活を

再認していく、という意味”⁷⁷⁾[p. 76]を込めたという⁷⁸⁾。平野はグループの参加者達が「創作」をするに際して、自身や近所の人といった身近な存在をモデルにすることを勧める一方、そのモデルに見合った服装や持ち物、天候、言動等がどのようなものか、実際のそれらから切り離して考えた上で綴るよう求めた。このようにすることは“事実を土台にして自由に創造力を働かせ、嘘の力で真実を語る(傍点は原文のママ)”⁷⁹⁾[p. 103]ことであり、“書きながら過去に起こったことや、その頃の自分というものを、はっきり知り、これから起こることや、将来の自分の生き方について考える力を養う”⁷⁹⁾[p. 69]ことだという。また、平野が創作グループで行う文学講義は、「創作」に欠かせない「虚構(フィクション)」のテクニックを学ぶためのものとして位置づけられていた⁷⁷⁾。

更に平野は、創作グループにおいて、参加者の作品の合評や、集団創作にも力を入れた。合評は、それぞれが自分の生活を見つめて書いたものについて参加者同士が意見を述べ合い、各自の生活を自分以外の視点からも見つめた上で、新たな視点を加えて作品を改稿するという試みであった⁸⁰⁾。また、集団創作は、同じ題材に複数人で取り組み、それぞれの視点を容れた作品を共同制作するという試みであった⁸¹⁾。これらの試みも、グループの参加者達が生活を再認識し、自己を相対化し続けることを助ける活動として位置づけることが可能である。

E. 「創作」活動がもたらした母親であることを相対化する視点

こうした経験を経た創作グループのメンバーは、グループでの成果について“原稿用紙を広げて、時に自分自身と対坐してみ、まわりの人達とのことを見つめてみて、気持ちに少しは融通性も出てきたように思ったりもします。「変っている」というふうには見えなかったものが、人それぞれの魅力に思えてきて、とても愉しいと思ったり尊く思えたりするようにもなりました。[原文ママ]”¹⁶⁾[p. 51]と述べている。この言葉からも、

創作グループで活動の成果が自分の生活を相対化する視点を得ることに求められていたことが分かる。

そして、このような成果を求めて活動することは、いわゆる母親であることやそれにまつわるものごとを相対化する契機をも含んでいた。例えば、創作グループの「老い」をテーマにした集団創作作品集『老いて生きる日々』(1972)⁸²⁾では、創作グループの参加者達がこうありたいとする老後の姿を託された人物として、子ども夫婦と同居するのではなく自ら老人ホーム(この老人ホームのあり方も詳細に記述されている)に入る女性が描かれている。創作グループはこの後も、「男を描く」をテーマにした作品集(作品集15号『女の翼』1975年刊行)や「つきあい」をテーマにした作品集(作品集16号『つきあい』1976年刊行)、そして「母を描く」をテーマにした作品集(作品集18号『母たちの物語』1977年刊行)を続々と生み出していった⁸³⁾⁸⁴⁾。

しかし、このような活動を続けてきた創作グループは、結成から丸7年を経た1971年(『老いて生きる日々』発行の前年)の4月、母親文庫から分離独立することになる。創作グループ側に独立の意図はなかったが、先述の通り、母体である上田市PTA母親文庫側から“創作グループがあるために母親文庫の会員が減る”²⁰⁾[p.218]との声が上がりがやむなく離脱を決めたのだという。このことについては、平野も創作グループメンバーも多くを語らない。グループのメンバーはその要請に対し“(筆者注:創作グループは)文庫の会員のアンケートの結果生れた会であり、読むことから書くことへ発展していったことはごく自然なことだと思いましたし(中略)読書運動の発展として望ましいことだと思つて”²⁰⁾[p.218]いたので、“(筆者注:創作グループの)会員はみな、(筆者注:母親文庫からの離脱の要請に)その熱意を阻まれた気がして淋しい思いをしました”²⁰⁾[p.219]との戸惑いを記録しているのみである。

しかし、創作グループが母親文庫からの離脱を余儀なくされた時期と母親文庫の活動の中心が母親自身の読書から子どもへの読書推進へ変遷し始

めた時期と重なっていることを踏まえ、「母親らしい」読書活動が母親文庫のなすべき活動として理由づけられる際のロジックに着目すると、そのロジックが“新しい自己に目ざめ”⁶⁸⁾[p.39]するための読書を追及する創作グループの活動とは相容れないものだったことが見えてくる。次章では、母親文庫において親子読書への志向が強まり始めた時期に、小学校教師が文庫との連携を深めていったことに着目する。そして、母親文庫の活動の主眼を子どもへの読書推進に置くことを主張した小学校教師が母親文庫の参加者達の立場や能力をどのように位置づける(位置づけ直す)ことによって、母親文庫の活動の転換を促そうとしていたのかを検討する。

IV. 母親文庫における親子読書志向の発芽と創作グループの離脱

A. 母親文庫における親子読書志向の発芽

創作グループがいわゆる母親であることやそれにまつわるものごとをも相対化するような作品集を続々と刊行した1970年代は、母親文庫の全体的な動きにおいては、創作グループの動向とは逆の流れが始まった時期であった。いわゆる母親であることを前提に子どもが通う学校との連携を深め、子どもへの読書推進を活動に含めていこうという志向の発芽である(詳細は第二章参照。)創作グループの母体である上田市PTA母親文庫もその例にもれなかった。同母親文庫の発行した文集を確認したところ、「創作グループ」が独立した翌年の文集⁸⁵⁾の巻頭に親子で同じ本を読んだ体験談が載せられ、その数年後の調査⁸⁶⁾においては子どもの通う学校との連携を深めたいという声が多く出されていた。

そして同時期には、母親文庫の会員達ばかりではなく会員達と関わる学校教師の間でも母親と子どもの読書活動に関する志向の変化が起こっていた。全国学校図書館研究大会の小学校・中学校における読書指導の実践に関する報告記事の分析を行った野口⁸⁷⁾は、1970年代の特徴として、教師達が親子読書の奨励を通して家庭と連携しつつ児童・生徒への読書指導にあたろうと試みるように

なったことを指摘している。こうした教師の試みが、学校や教師と共に子どもへの読書推進にあたらうとする母親の志向との好循環を生んだことは想像に難くない。先述の通り、母親文庫の結成当初、教師達が児童の教育で手一杯である為母親の読書団体に関わる余裕はないというスタンスをとっていた⁴⁾ことからすれば、これは大きな変化である。教師達の姿勢を変化させた要因としては、1971年から実施された学習指導要領が初めて国語科学習の中に読書を位置づけ、授業の中で「読書指導」を行わなくてはならなくなったことがあったと想像される。この学習指導要領の改訂は、それまで読書に関心がなかった教師達に子どもへの読書指導を職務の一環と認識させるとともに、従来から読書に熱心であった教師達には「お仕着せの読書」への危機感を抱かせるものであった⁸⁸⁾。そして、どちらの立場の教師にとっても、母親と連携しつつ子どもの読書機会を確保していくことは喫緊の課題であった訳である⁸⁸⁾。

このような中、小学校教師達が母親文庫の文集に寄稿したり母親文庫関連の研修会の講師を務めたりすることが増えていく。こうした教師の一人に、小口明がいる。小口は信州大学教育学部を卒業後、長野県下の小学校に勤務しつつ子どもへの読書推進に取り組んでいた。そして早くも1965年の5月、『長野県図書館協会会報』に論文⁸⁹⁾を掲載し、その中でPTA 母親文庫と教師の関係について“PTA 文庫として名はあるが、それを子どもの読書生活に結びつけようとする、結び目としての努力が教師集団の中に生れてこないのである。「親子読書」を流行に終わらせない⁹⁰⁾ためにも教師自らが、この読書集団の核となって働くべきなのに、その動きがないのはどうしたことなのか。”⁸⁹⁾[p. 39]と述べている。

その小口は1970年、日本教職員組合の教育研究全国集会青少年分科会で、日本子どもの本研究会(1967年創設)の創設者のひとりであり、親子読書地域文庫全国連絡会(1970年結成)の機関紙『親子読書』の編集者でもあった代田昇と知り合い、以前に増して熱心に子どもへの読書推進に取り組むようになる⁹¹⁾。小口は翌1971年、勤

務地の諏訪市に「諏訪市親子読書会」を立ち上げ、その参加者を募る際には諏訪市PTA 母親文庫と連携してあつた⁹²⁾。これは1965年の論文で描いたPTA 母親文庫と子どもの読書生活を結びつける“結び目”⁸⁹⁾[p. 39]としての教師の役割を自らに課す試みだったと言えよう。

B. 我が子への読書推進における「教師以上の適者」としての母親

それでは、小口は母親文庫の参加者達に親子読書を勧めるにあたり、どのような方法で説得を試みたのだろうか。その説得において、教師としての小口と母親達の関係性や、母親の立場、能力はどのようなものとして提示されているのだろうか。

小口は、教師と母親と共に子どもの読書生活を充実させるのに欠かせない存在として位置づける一方、子どもを読書に導くにあたり母親にしかしてやれないことがあると述べることで母親達の親子読書運動への参加を促そうとする。たとえば、諏訪市のPTA 母親文庫の文集に子どもに本を選んでやる際のポイントを説明する文章を寄せた際、小口は出版社や作者の知名度、新聞等での評判や値段といった“形式的なもの”⁶⁰⁾[p. 15]で選ぶことを戒め、“ほんとうに問題にすべきは内容”⁶⁰⁾[p. 15]であると述べている。そして、それに続けて“読書指導のめやすとして、よく「適書・適時・適者」ということがいわれます。その子の能力や生活上の問題点にあった本を、その時期を考え、その子に強い影響力をもった人が与えるのがよいのです。こうした面での適者として教師以上に、一日の大半を子どもとともに過ごす母親があげられます。”⁶⁰⁾[p. 15]と述べ、母親が子どもへの読書推進で果たす役割の大きさを強調している。

この文章において、小口は自らを子どもの本と子どもへの読書推進について専門的な知識を持つ者として提示し、子どもの本の選び方のポイントを縷々説明している。しかし、小口は子ども(一般)への読書推進の知識をもつことと、特定の子ども(“その子”⁶⁰⁾[p. 15])に最も適したやり方で本を与えられることとを区別し、後者について

母親を教師以上の適者として位置づける。それまでのPTA 母親文庫の母親像が「新教育を受ける我が子よりも遅れた存在」であったことと比較すれば、この位置づけは画期的な変化である。

また、母親達が我が子に適した本を見出しうる根拠として“一日の大半を子どもとともに過ごす”⁶⁰⁾ [p.15] していることが挙げられていることにも留意すべきである。この根拠づけは、母親達が日常生活の外側に知識を求めずとも我が子への読書推進をなしうることを示唆している。それまでの母親文庫における読み書きは、母親が日常生活では得られない知識を得て「遅れ」（これは、新教育を受ける子ども一般と比較した時の「遅れ」であろう）を克服し、時にはそうした知識によって日常生活を相対化することまでも志向するものであった。しかし、母親が「我が子への」読書推進を行うことを推奨する教師によれば、母親文庫の参加者達が再優先すべきは、自分達が新たな知識を得ることで、そのために参加者同士がつながりをもつことでもなく、我が子の様子を見つめてその子に適した本を与え、我が子と一緒に読むことだということになる。もちろん、小口は母親達が（子どもとの）読書活動を行うために日常生活の外に知識を求めることを否定してはいない。小口が母親文庫の研修会で講師を務めているのは前述の通りである。また、小口は所属する「子どもの本研究会」で、家庭文庫、地域文庫や親子読書会活動に関わる母親達と活動を共にしている。しかし、小口の文章⁶⁰⁾においては、母親の読書活動は親子での読書活動とされており、親子での読書活動を行う母親に最も必要な情報は日々我が子と接する中で得る我が子についての情報だとされている。我が子に特化した情報を抜きにしては、いくら一般的な知識を得たとしても、我が子への読書推進における“適者”⁶⁰⁾ [p.15] の地位を生かすことはできないのである。

このため、小口は先ほどの文章の結びで“最近の母親文庫運動の中には子どもの本や子どもの読書生活が直接話題としてとりあげられることは少なくなってきたように思います。なかには母親文庫は母親の教養を高めるものだと割切っている方

もあるようです。子ども不在の母親文庫運動はややおかしいように思いますがどうでしょうか。（傍点は原文のママ）”⁶⁰⁾ [p.15] と述べている。これまで見てきた通り、母親文庫がそもそも“母親の教養を高める”⁶⁰⁾ [p.15] のものとして始まっていて、子どもへの読書推進こそが母親文庫にとっての“最近の”⁶⁰⁾ [p.15] 活動であることを加味すれば、この母親文庫批判において文庫の来歴が十分に理解されているとは言い難い。しかし、重要なのは、この批判において母親文庫が母親自身のための文庫ではなく母親の手による子どものための文庫と解釈され、母親文庫の参加者がいわゆる母親として位置づけられ、そして、いわゆる母親の役割を果たすことと“母親の教養を高める”⁶⁰⁾ [p.15] ことが別個の活動とされていることである。

そしてこの文章に描かれたような母親文庫像、母親像が受容されていくにつれ、元来の母親文庫や参加者達のあり方との齟齬が会員達に意識されるようになっただろうことは想像に難くない。

例えば、小口が設立に関わった「諏訪市親子読書会」と同じ地域で活動し、親子読書会と活動情報の共有などの連携を行っていた諏訪市PTA 母親文庫の参加者は、“母親文庫の係の方から、母子で読む読書を勧められ”て⁹³⁾ [p.54] 試み、“感激でいっぱい”⁹³⁾ [p.54] になった経験について同文庫の文集に寄稿しているが、そこでの親子読書の成果の提示のされ方やその前提となる母親文庫参加者の立場、能力は、子どもへの読書推進志向の発芽以前の母親文庫の参加者（創作グループのメンバー等）が活動の成果を提示するときのそれと大きく異なっている。

“母子で読む読書”⁹³⁾ [p.54] を試みた参加者は、夢中で本を読み終えた時の我が子の“輝きに満ちた目を久し振りに見た”⁹³⁾ [p.54] ことや、本の内容に関連して自分の幼少期（戦中や終戦直後）の生活について“くわしく話してや”⁹³⁾ [p.54] る機会を初めて得たことへの“感激”⁹³⁾ [p.54] を述べている。ここで参加者が親子読書の成果として挙げているのは、いわゆる母親として文字通り我が子に眼差しを注ぐ機会を得たこ

と、そして、自分のこれまでの経験の中に我が子に語るべきものや語ることができるものがあると自覚し、実際に我が子に語ってやる機会を得たことだ。親子読書の成果についてのこのような説明は、創作グループのメンバーが活動の成果として、ものごとを見つめるだけでなくその視点を相対化する契機を得たことを挙げていた¹⁶⁾のと対照的である。また、親子読書の成果を語る参加者は自分をいわゆる母親として位置づけ、自分の経験の中から我が子に語るべきものを見出しているが、このことも創作グループのメンバーを含む子どもへの読書推進志向発芽以前の母親文庫の参加者達が、自分達のことを新教育を受ける子ども達よりも「遅れ」がちな存在と見なし、日常生活の外にある知識を得なくては子どもの教育もままならないという立場をとっていた⁴¹⁾ことと対照的である。

母親文庫の参加者達がいわゆる母親として我が子を見つめることそのものに価値を見出し、また、既に我が子に語るべき言葉を持っている者として自分達を位置付けるようになった時、日常生活からは得られない知識を求めて読み書き話し合い、いわゆる母親であることの相対化をも試みる小集団は異質なものに見えたのではないか。創作グループの離脱を求める際に上田市PTA母親文庫から発せられた“創作グループがある為に母親文庫の会員が減る”²⁰⁾ [p. 218] という言葉は、このような背景の中のものと思われる。

V. おわりに

A. 本論の知見

本論は、①特に1970年代前後の時期において、母親文庫の活動の主眼はどのように変化してきたのだろうか。②母親が自身のために読み書きすることや子どもへの読書推進を行うことが「母親」文庫の活動として「自然な」ものと見なされる際、母親の立場や能力はどのように位置づけられていたのだろうか。③そのように位置づけられる母親達の活動に図書館員ないし小学校教師はどのように関わっていたのだろうか。という3つの問いに答えるべく、母親文庫の全県大会の討議テ-

マの内容の変化等を検討し、また、母親自身の読み書きを極めた創作グループを巡って、同グループの助言者である図書館員や母親文庫における親子読書推進を主張した小学校教師が、母親文庫の参加者達をどのような人々と位置づけつつそれぞれの活動を行っていたかを検討してきた。その結果、これらの問いに以下のような回答を与えることができた。

まず、問①に対する回答を述べる。母親文庫における活動の主眼は、1950～60年代には母親自身の読み書きに置かれていた。しかし、1960年代末～70年代には母親自身の読み書きへの志向と子どもへの読書推進の志向が並び立つようになる。そして、1980年代以降、母親文庫の活動の重心は子どもへの読書推進に傾いていった。

次に問②に対する回答を述べる。創作グループの助言者を務めた図書館員、平野勝重は母親文庫の参加者達を、読み書き活動を通して家（イエ）での家事子育てや農作業といった日常的な経験からは得られない視座を得、「新たな自己に目ざめ」⁶⁸⁾ [p. 39] ようとする欲求を持つ人々と位置づけた。このような位置づけの下で行われる読み書き活動に子どもの存在は必須ではなかった。更に言えば、平野と共に「新たな自己に目ざめ」⁶⁸⁾ [p. 39] するための読み書きを極めた「創作グループ」の人々は、グループの活動を通していわゆる母親であることやそれにまつわるものごとを相対化するような視点をも得ていった。これに対して、母親文庫における親子読書推進を主張した小学校教師、小口明は、母親文庫の参加者達をいわゆる母親として位置づけ、母親として我が子と日々過ごしている参加者達は（日常生活の外に知識を求めずとも）、我が子への読書推進における教師以上の適者であると評した。この評価はそれまでの母親文庫における「新教育を受ける子どもよりも遅れがちな存在」としての母親像をくつつがえす一方、母親文庫でそれまで「自然に」行われてきた子ども抜きでの読み書き活動の根柢を失わせた。

最後に問③に対する回答を述べる。図書館員平野は母親文庫の参加者達だけでなく、自分のこと

をも「新たな自己に目ざめ」ようとする欲求に基づいて読み書きを試みる者と位置づけ、その欲求を満たす術を知る者として、術を知らない彼女らの読み書きへの助言を行うという立場をとっていた。被助言者達が特定の何者かになるのではなく、自分が何者であるかを問い続ける者になるのを目指すことは、平野の助言活動を戦前戦中の図書館員による読書指導と区別することを可能にしていた。一方、小学校教師小口は、母親文庫の参加者達と自分を共に子どもへの読書推進を行うべき者と位置づけるが、それにあたって子ども一般を対象とする自分の活動と我が子を対象とする参加者の活動を区別した。そして、我が子に最も適した形での読書推進はいわゆる母親である参加者にしか果たせないと強調することで参加者達を子どもへの読書推進活動へ向かわせようと試みた。

B. 今後の課題

最後に本論の課題を3点挙げ、それらへの今後の対応を記述することで結びとする。

まず1点目の課題は、本論が母親文庫の参加者達が子どもと「一緒に」読書する際の具体的な場面の变化について十分な検討を行えなかったということである。母親文庫の1960年代の文集からは参加者達が子どもと近接した空間で読書し、読書する母親の後姿を通して子どもに良い影響を与えようと試みていたことが伺える。この活動は今日の親子読書のイメージからは外れるものの、読書を通して子どもと何かしらの関わりをもとうと試みる点では親子読書と重なる部分があるように思われる。今後はこうした活動を含めた母親文庫における「親子読書」の具体的場面の变化を明らかにすると共に、それぞれの「親子読書」において母親と子どもと読書がどのように関連づけられていたかを検討していきたい。

次に2点目の課題は、本論が創作グループの行った活動の中で①いわゆる母親であることとの結びつきの強い活動及び②創作グループが母親文庫から分離した後の活動について十分な検討を行えなかったということである。創作グループの参加者達はグループでの読み書き活動を通していわ

ゆる母親であることを相対化する視点をもつようになった一方、童話を書いたり、「母と子の読書室」をもつ新図書館を求めて市への働きかけを行ったりといった、いわゆる母親であることとの結びつきの強い活動も行っている。今後はこれらの活動といわゆる母親であることを相対化する視点とがどのように関連していたかを検討していきたい。また、創作グループは母親文庫からの分離後も、母親文庫時代に加入した“昭和の一けた世代までに生まれ”⁶⁵⁾[p.215] たメンバーを中心に平野と共に半世紀以上に渡って学習を継続した。今後は、分離後の創作グループの学習がどのように進展し、平野が図書館員としてどのように関わったのか、更にはそのような学びの姿勢が母親文庫の活動のみならず上田市周辺における社会教育の歴史(上田自由大学等)とどのように関連していたかについても分析を進めていきたい。

最後に3点目の課題は、母親文庫の活動の主眼が子どもへの読書推進に置かれるようになった後の母親文庫の参加者達の立場や能力の位置づけられかたの変化について検討を行えなかったことである。配本所の文集等からは、1970年代を迎える頃から我が子への読書推進活動に取り組み始めた参加者達が、年を経るごとに我が子のみならず子ども一般への読書推進(子どもの通う学校での読み聞かせ等)に取り組みようになっていく様子が伺える。そしてこの変化に伴い、参加者達の立場や能力の位置づけられ方も更新されていったものと推測できる。今後は母親文庫の1970年代以降の活動に焦点を当て、この変化の詳細を検討していきたい。

注・引用文献

- 1) NPO ブックスタート(Bookstart Japan)によると、0歳児健診の際などに子どもに絵本を贈るとともにボランティア等が読み聞かせを行う「ブックスタート」は、2016年10月31日現在全国の979市区町村で実施されており、実施率は全国の市区町村(1741市区町村)中の約56パーセントに当たるといふ。NPOブックスタート、“実施自治体一覧”。<http://www.bookstart.or.jp/about/ichiran.php>, (accessed 2016-11-14).
- 2) 日本経済研究所、親と子の読書活動等に関する

- 調査（平成16年度文部科学省委託事業 図書館の情報拠点化に関する調査研究）. 2004. http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05111601/001.pdf, (accessed 2016-11-14).
- 3) 叶沢清介. 図書館, そしてPTA 母親文庫. 日本図書館協会, 1990, 304p.
 - 4) 叶沢範子. 母親文庫の生い立ち. 新刊ニュース: 東京出版, 1960, vol. 11, no. 8, p. 10-12.
 - 5) もちろん, 初期の母親文庫においても参加者と子どもの関係が意識されていなかった訳ではない。本を読み始めた母親の姿を見た子どもが「うちのかあちゃん勉強はじめた」と喜び, 自分も学校の勉強に進んで取り組むようになったというのは初期の母親文庫の美談としてよく知られている。しかし, この美談が, 農作業や家事育児に追われ「勉強」する時間をもてない母親の暮らしが文庫に参加することで変化したことを強調することで成立していることには留意すべきだろう。この美談の母親と, 子どもへの読書推進に取り組む母親をひと括りにして扱うことは, それぞれの母親の関わる「読書」活動の特徴を見逃してしまうことになりかねない。
 - 6) 山口吉宗. 長野県におけるPTA 母親文庫: 最近の事情とその考察. 図書館界, 1963, vol. 14, no. 6, p. 196-206.
 - 7) 県立長野図書館五十年史. 県立長野図書館, 1981, 615p.
 - 8) 1959年以降に設置された配本所も全てが会員による運営委員会によって運営されている。また, 配本所よりも先に配本所運営委員会が立ち上がり, 委員会が配本所設置運動の母体として活動する場合（埴科配本所, 北佐久配本所, 上小配本所）もあった⁶⁾。
 - 9) “長野県PTA 母親文庫 長野県PTA 親子読書推進の会会員数の推移”. あゆみ最終号. 長野県PTA 親子読書推進の会編. 2014, p. 43. なお, 60年代の平均値は筆者が算出した。
 - 10) 叶沢³⁾ [p. 119-120] に1984年5月現在の文集の一覧が掲載されている。
 - 11) 配本所を含む母親文庫の本の流通経路の詳細は第II章A節を参照のこと。
 - 12) 県立長野図書館三十年史. 県立長野図書館, 1959, 592p. なお, 同書によれば, 母親文庫の配本所設置について地元紙は“名実ともに県民の図書館へ” [p. 221] という見出しで報じたという。
 - 13) 母親文庫における子どもへの読書推進の志向の強まりや学校, 小学校教師との連携の模索の過程についての詳細は, 本論第II章を参照されたい。
 - 14) 創作グループ結成の発端となったのは, 上田市PTA 母親文庫が“617の全グループ（筆者注: 母親文庫の本を回覧する際の4人1組のグループ）に対し「私たちの希望と意見」というアンケートを行ったところ, 全体の45%の会員から「書く勉強をしたい」という希望が寄せられた”⁷⁾ [p. 178] ことだという。
 - 15) 竜野静子. “創作グループについて: 序にかえて”. 雪の下に青い芽が: PTA 母親文庫創作グループ3周年記念出版. 平野勝重編. 北斗社, 1966, p. 1-3.
 - 16) 藤沢敏子. “創作グループでの三年間”. 雪の下に青い芽が: PTA 母親文庫創作グループ3周年記念出版. 平野勝重編. 北斗社, 1966, p. 46-51.
 - 17) ただし, 上田市・小県郡PTA 母親文庫編. 白いえぶろん, 1966, 227p. によれば, 創作グループには上田市の参加者以外にも, 松本市, 岡谷市, 長野市, 諏訪市, 小諸市, 佐久市, 埴科郡, 東筑摩郡等県下の各市郡からの参加者が存在したとのことである。
 - 18) たとえば長野市PTA 母親文庫では1969年から文学鑑賞婦人学級を開催している。また, 飯伊婦人文庫は1959年に「かざこし読書会」を発足させ, 憲法や正法眼蔵, 奥の細道等を読んでいる。
 - 19) “年表”. あゆみ最終号. 長野県PTA 親子読書推進の会編. 2014, p. 23-30.
 - 20) 竜野静子. “創作グループ十年の歩み”. みんなで歩いて: 本と母の会創作グループ10周年記念作品集. 本と母の会創作グループ編. 1974, p. 217-219.
 - 21) なお, 母親自身の読み書き活動は図書館員だけでなく公民館職員によっても支えられていた。例えば, 母親文庫の中の一団体である「飯伊婦人文庫」で読み書きの指導にあたったのは, 竜丘村教育長・公民館長の木下右治であった。(同文庫の設立は木下が公民館長を退職した翌年だが, 木下は在職中から文庫の原型となる団体への指導を行っており, 退職後も文庫に関わり続けた。)⁵⁶⁾
 - 22) 篠原由美子. 上田市立図書館におけるPTA 母親文庫創作グループ. 図書館界, 2007, vol. 59, no. 2, p. 146-153.
 - 23) 菅原峻編. PTA 母親文庫はどこでもできる: 6人の青年図書館員の報告から. 図書館雑誌, 1958, vol. 52, no. 4, p. 100-110.
 - 24) 読書活動の参考資料: 長野県PTA 母親文庫の事例. 文部省社会教育局, 1958, 18p.
 - 25) なお, 長野県図書館協会公共図書館部会編. 読書普及活動研究委員会報告書: 長野県PTA 母親文庫の現状と課題. 1981, 18p. においては, 母親文庫を通じた読書普及活動の重点を定めるにあたっては“母親たちが読書の目的や効用をどのように考えているかを明確に把握” [p. 5] することが必要だが, “「母親の読書論」ともいべきものを, 図書館および文庫関係者が, 時代の経過のなかで正確にとらえてきたとは言い難い” [p. 5] ことが活動の重点を定めることを困難にしているとの指

- 摘がある。
- 26) 長野県 PTA 母親文庫運営協議会主催の研修・地区公開講座は 1970 年から 2013 年まで毎年開催された。テーマ、講師等の詳細は付録 2 を参照されたい。
- 27) ただし、中学校の PTA を所属の母体とする参加者達や、子どもが小中学校を卒業後に母親文庫の OG 会を立ち上げ OG 会を所属の母体とした参加者達、また PTA ではなく婦人会を所属の母体とする参加者達も一定数含まれている。
- 28) 佐々井司, 別府志海, 石川晃. 統計都道府県別にみた女性の年齢 (5 歳階級) 別出生率および合計特殊出生率: 2012 年. 人口問題研究, 2013, vol. 69, no.4, p. 150-156. による。同資料によれば、長野県における 1950 年から 2000 年までの平均出生年齢 (10 年ごと) は次の通り。1950 年: 30.36 歳, 1960 年: 28.80 歳, 1970 年: 28.53 歳, 1980 年: 28.33 歳, 1990 年: 29.33 歳。これらの数値により、1950 年頃から 1990 年頃にかけて母親文庫の参加者達は 28 歳～30 歳頃に出生し、34 歳～42 歳頃に小学校の PTA で活動する機会が多かったと推測した。なお、このモデルは平均出生年齢もとにしてあるため、複数の子どものいる参加者の場合は 34 歳を迎えるより早く PTA 活動に参加し、42 歳を超えても PTA 活動を継続することとなる。
- 29) この数字についてのみ長野県の女性に特化したデータが見当たらなかったため、佐藤秀夫, 佐藤信雄, 藤村和夫. “義務教育”. 日本近代教育史事典, 平凡社, 1971, p. 169-180. に掲載されている 1977 年の全国平均値 (高等女学校進学率 5.6%, 女性の高等小学校進学率 47.4%) から推測した。
- 30) 長野県情報政策課統計室. “進学率及び就職率の推移”. 平成 28 年度 (2016 年度) 学校基本調査 (確報) 長野県分. http://www3.pref.nagano.lg.jp/tokei/1_gakkoukihon/H28kakuhou/H28gakkoukihonkaku.htm, (accessed 2017-3-12).
- 31) 国勢調査報告, 昭和 30 年, 第 5 巻 その 20 (都道府県・市区町村編 長野県). 総理府統計局, 1959, 438p.
- 32) 国勢調査報告, 昭和 35 年, 第 4 巻 その 20 (都道府県・市区町村編 長野県). 総理府統計局, 1964, 532p.
- 33) 国勢調査報告, 昭和 40 年, 第 4 巻 その 20 (都道府県・市区町村編 長野県). 総理府統計局, 1966, 481p.
- 34) 国勢調査報告, 昭和 45 年, 第 3 巻 その 20 (都道府県・市区町村編 長野県). 総理府統計局, 1972, 716p.
- 35) 国勢調査報告, 昭和 50 年, 第 3 巻 その 20 (都道府県・市区町村編 長野県). 総理府統計局, 1977, 739p.
- 36) 国勢調査報告, 昭和 55 年, 第 2 巻 その 2 20 (都道府県・市区町村編 長野県). 総理府統計局, 1982, 1085p.
- 37) 国勢調査報告, 昭和 60 年, 第 3 巻 その 2 20 (都道府県・市区町村編 長野県). 総務庁統計局, 1987, 666p.
- 38) 国勢調査報告, 平成 2 年, 第 3 巻 その 2 20 (都道府県・市区町村編 長野県). 総務庁統計局, 1992, 455p
- 39) 筆者が国勢調査³¹⁾³²⁾³³⁾³⁴⁾³⁵⁾³⁶⁾³⁷⁾³⁸⁾から算出した長野県の 30 歳代女性の就労率は次の通りである。1955 年: 68.7 パーセント, 1960 年: 68.4 パーセント, 1965 年: 67.5 パーセント, 1970 年: 70.7 パーセント, 1975 年: 62.9 パーセント, 1980 年: 65.6 パーセント, 1985 年: 65.9 パーセント, 1990 年: 64.5 パーセント。
- 40) 第 2 次世界大戦後の日本における専業主婦化については、落合恵美子. 21 世紀家族へ: 家族の戦後体制の見かた・超えかた. 有斐閣, 2004, 283p. に詳しい。
- 41) この点については、山崎沙織. 「読めない母親」として集うことへの分析: 長野県 PTA 母親文庫の 1960 年代から. 社会学評論, 2015, vol. 66, no. 1, p. 105-122. を参照されたい。
- 42) 先行研究には例えば次のものがある。塩見昇. 学習社会における図書館: 図書館の教育機能. 教育学論集, 1991, no. 20, p. 5-15. ただし、土橋 (2015) は、平野の論の中核をなす思想として“自立”があったのではないかと指摘を行っている。土橋和弘. 平野勝重の言説研究 (前川恒雄との論争, 「創作グループ」, 「社会教育大学」などにみられる図書館活動の思想として: 〈来るべき図書館〉の理論の「自立性 (自律性)」のために. 信州豊南短期大学紀要, 2015, no. 32, p. 87-124.
- 43) 2015 年 10 月 3 日上田市情報プラザにおいて平野勝重に対して著者が実施したインタビューより。
- 44) 前川恒雄. 公共図書館の発展を. 図書館雑誌, 1969, vol. 63, no. 1, p. 10-13.
- 45) 平野勝重. 公共図書館の機能: 主婦たちの読書をめぐって. 図書館界, 1969, vol. 21, no. 1, p. 2-7.
- 46) 平野勝重. 公共図書館の社会的機能. 図書館雑誌, 1969, vol. 63, no. 1, p. 7-9.
- 47) 平野勝重. 読書会における図書館員の助言とは何か. 月刊社会教育, 1969, vol. 13, no. 9, p. 94-97.
- 48) 文部科学省. “学び直しについて”. 高度人材養成のための社会人学び直し大学院プログラム. <http://s-manabinaoshi.jp/about>, (accessed 2016-11-17).
- 49) 外国人留学生, 外国人労働者の受け入れに伴う多文化共生の必要性と, 多文化共生の拠点のひとつとしての図書館については下記を参照。総務省自

- 治行政局国際室長。地域における多文化共生推進プランについて。2006, http://www.soumu.go.jp/main_content/000400764.pdf, (accessed 2016-11-14).
- 50) 根本彰. 理想の図書館とは何か: 知の公共性をめぐって. ミネルヴァ書房, 2011, 208, 6p.
- 51) 渡邊齊史. “司書職制度の限界”. 公共図書館の論点整理. 田村俊作, 小川俊彦編. 勁草書房, 2008, p. 84-125.
- 52) 志熊敦子編. 女性の生涯学習. 財団法人全日本社会教育連合会, 1993, 111p.
- 53) 木村涼子. 女性の人権と教育: 女性問題学習における主体形成と自己表現. 国立婦人教育会館研究紀要. 2000, no. 4, p. 35-42.
- 54) 伊藤雅子. 女性問題学習の視点: 国立市公民館の実践から. 未来社, 1993, 231p.
- 55) このような指摘は, 木村 (2000)⁵³⁾等によってなされている。
- 56) 山梨あや. 近代日本における読書と社会教育: 図書館を中心とした教育活動の成立と展開. 法政大学出版局, 2011, 362p.
- 57) これらの研究の中で特に本論との関係が深いものに, 汐崎順子. 日本の文庫: 運営の現状と運営者の意識. Library and Information Science. 2013, no. 70, p. 25-54. がある。
- 58) 県立長野図書館⁷⁾の作成した母親文庫の年表 [p. 269-278] に, 母親文庫の設置場所が記載されている。基本的には各地域の図書館が配本所を兼ねたが, 教育事務所や教育委員会, 教育会館内に設置された配本所も見られる。
- 59) 長野県図書館大会は1950年に第1回大会が開催され, 当初の参加者は長野県図書館協会関係者が中心だった (ただし, 協会関係者に限らず誰でも参加することは可能だった) が, 1954年の第4回大会の開催にあたり「図書館を運営する側の人だけで協議する一方交通を避けて, 新しい図書館運営方式の発見のために, 図書館を利用する側の人々, とくに当時県内にほうはいとして起っていたPTA母親文庫会員の参加を求めため「PTA母親文庫部会」を設置³⁾ [p. 150] する運びとなったのだという。
- 60) 小口明. “子どもの本と母親文庫運動”. すわ9号. 諏訪市PTA母親文庫運営委員会編. 1970, p. 14-15.
- 61) 長野県PTA母親文庫運営協議会編. 第34回長野県図書館大会「母親の読書部会」記録集. 1985, 46p.
- 62) I-2: 公共図書館, 小中学校, 母親の合同部会開催と同じ1984年 (昭和59年) 頃に県立長野図書館が作成した「PTA母親文庫配本所の今後の方向について (試案)」は, 配本所の今後の方向性として, 県立図書館の本だけでなく市町村立図書館の本を母親文庫で活用していく方向を検討している。(2016年12月1日に県立図書館企画協力課担当者に同試案の内容を確認した。なお, 同試案は, 昭和59年4月23日付で県内公共図書館長及びPTA母親文庫配本所主管ならびに運営委員長あてに送付されたとのことである。)
- 63) 「創作」の詳細は第III章D節を参照されたい。
- 64) このことは平野から筆者への2015年12月22日付の書簡にて確認した。(インタビュー⁴³⁾の補足として平野と筆者は複数回書簡の交換を行っている。) 同趣旨の記述は, 平野勝重. “おかあさんたちと共に: あとがきにかえて”. 雪の下に青い芽が: PTA母親文庫創作グループ3周年記念出版. 平野勝重編. 北斗社, 1966, p. 300-305. にも見られる。また, 創作グループの会員は, “会員が平野さんの講義を渴望するのは, 全員個々を書くという過程で, テーマの掴み方とか会話の役割とかの, 今つまづいた足元に照明を当てて, その克服の方法をハッキリさせてくださるような時宜を得た内容であるからです”⁶⁵⁾ [p. 214-215] と語っている。
- 65) 上野博子. “(三) 自立への苦悩”. はるかなる坂道: 創作グループ15周年記念 作品集19号. 本と母の会創作グループ編. 1978, p. 213-217.
- 66) 平野勝重. 雪の日の記憶. 図書館雑誌. 1966, vol. 60, no. 8, p. 9-11.
- 67) 平野勝重. 母親文庫が主婦を変えた: 図書館活動の現場から (1). 朝日ジャーナル. 1972, vol. 14, no. 35, p. 46-49.
- 68) 平野勝重. 本を読む母親たちと共に. 月刊社会教育. 1966, vol. 11, no. 1, p. 36-41.
- 69) 母親文庫創設時に県立図書館長を務めた叶沢清介は“PTA母親文庫というものを心がけたねらいと熱意はそこ (筆者注: “母親の教養の向上と児童生徒の育成”) にあるので同時に, 読書の領域における底辺層対策であり, 「何を読むか」ということよりもまず, 本を手取る対策であり, 手段であり, 活動である。” [p. 22]³⁾と述べる。
- 70) 1970年当時の県立図書館長, 佐藤文一は“PTA母親文庫の目的は, 皆さんもご存じのとおり, 一人でも多くの母親に「読書をすすめる」ことにあるわけですが, さらに加えて「読書内容を深める」ことにもあることはいうまでもありません。しかし, ともしれば, 「読書内容を深める」ことだけに重点がおかれ, 「読書をすすめる」ことがおろそかにされているのではないかとの声も聞かれます。” [p. 6] と述べている。佐藤文一. 母親文庫の活動について. すわ9号. 諏訪市PTA母親文庫運営委員会編. 1970, p. 6-7.
- 71) 平野勝重. 新しい自覚の芽ばえ: 図書館活動の現場から (2). 朝日ジャーナル. 1972, vol. 14, no.

- 36, p. 45-48.
- 72) 平野は、著書⁷³⁾にこの文章を再録した際、“想像力によって他者の体験を主体化していく読者”を“想像力によって他者の体験を自分の体験としていく読者”[p. 23-24]と書き換えているが、意味するところは同じであろう。
- 73) 平野勝重. 自立への旅だち：読み、書き、生きる信州の女性たち. 郷土出版社, 1981, 222p.
- 74) ただし平野はインタビュー⁴³⁾において、自分が助言者を務める際のよりどころとなったのは、自分の文学評が何度も「日本読書新聞」等に取り上げられたことだと語っている。ここからは平野が文学を読むことについて一定水準以上の知識がある者として自他ともに認められていたことがうかがえる。
- 75) ただし、山梨⁵⁶⁾は当時実際に開催されていた読書会が全てこのモデル通りに行われていた訳ではないことも指摘している。
- 76) 平野は次のように述べている。“PTA 母親文庫という読書運動をすすめている主婦たちに限って言えば、書くことは読書と結びついた行為と考えるべきであろう。“読むことから書くことへ”というようなことがいわれたりするが、私はそのような段階説はとらない。(中略)読むことにより、書く力が生れ、書く力によって、読むことが深まって行く——というように考えた。”[p. 43-44] 平野勝重. 集団で思考し、創造する：図書館活動の現場から (3). 朝日ジャーナル. 1972, vol. 14, no. 37, p. 43-46.
- 77) 平野勝重. PTA 母親文庫の中に生れた“創作グループ”の学習. 月刊社会教育. 1965, vol. 9, no. 2, p. 76-78.
- 78) 平野によれば、フィクションを用いるという点において、創作グループの活動は生活綴方運動とは異なるものであるという⁷⁷⁾。
- 79) 平野勝重. 読むこと書くこと生きること. 北斗社, 1966, 125p.
- 80) 平野 (1981)⁷³⁾の p. 35-39 には、創作グループのメンバーの1人が肺を病む従姉と旅をした経験を写實的に綴った詩が合評に付された際の過程が紹介されている。その詩に対して、他のメンバーからは具体的な地名を出したり従姉を登場させたりしなくても良いのではないかと、「病める胸」という言葉で表現したいことが伝わりづらい等のコメントが寄せられた。作者であるメンバーは、それらのコメントに対して「病める胸を切り開く」という言葉に病気に手術を施すという意味と病を悩む気持ちを救うという意味の2つを込めたと説明する中で、従姉の「病める胸」に自身の思い悩む心を重ねていたことを自覚した。そして、今回の合評会には、「病むこの胸を切り開く術もない旅」を続ける「私」を作中主体とした改稿作品を提出したという。
- 81) 平野は創作グループのメンバーに集団創作を提案したのはその時期の創作グループにおいてメンバー達が互いの作品の個性を尊重しようとするあまり“個々の発想に固定化、定型化の傾向が見られるようになった”⁷³⁾[p. 45] ためであるという。集団創作のテーマは「老い」であったため、メンバーは仲間と共に老人ホームへ取材に行き、“同じ施設の人々を見てくる眼が、それぞれ違っている”⁷³⁾[p. 48] “私だったら関心を持たない人物を、グループの誰かが関心を持って作品化している”⁷³⁾[p. 48] という経験をした。その結果、共同制作された作品は“複眼によってとらえたものを、その内容としている”⁷³⁾[p. 48] 作品に仕上がったという。
- 82) 本と母の会創作グループ編. 老いて生きる日々. 1972, 229p.
- 83) “創作グループ年表”. はるかなる坂道：創作グループ15周年記念 作品集19号. 本と母の会創作グループ編. 1978, p. 218-227.
- 84) “創作グループ年表”. それぞれの季節の中で：創作グループ20周年記念作品集. 本と母の会創作グループ編. 1983, p. 465-476.
- 85) 上田市・小県郡PTA 母親文庫運営委員会編. つむぎ創刊号. 1972, 105p.
- 86) “上田市・小県郡PTA 母親文庫実態調査報告”. つむぎ4号. 上田市・小県郡PTA 母親文庫運営委員会編. 1975, p. 129-132.
- 87) 野口久美子. 小学校・中学校における読書指導の実践に関する報告記事の分析：全国学校図書館研究大会を事例として. Library and Information Science. 2009, no. 62, p. 111-143.
- 88) 増村王子. 改訂指導要領実施を前に. 子どもの本棚. 1971, vol. 1, no. 1, p. 2-3.
- 89) 小口明. マスコミ時代の読書指導のビジョンを求めて. 長野県図書館協会会報. 1965, no. 60, p. 11-16, 39.
- 90) 椋鳩十が「母と子の20分間読書運動」を提唱し鹿児島県で実施したのは1960年のことである。
- 91) 小口明. “火をつけた人、代田さん”. 代田昇遺稿・追悼集 読書運動とともに：子ども達に読書のよろこびを. 代田昇遺稿・追悼集編集委員会. ポプラ社, 2002, p. 462-463.
- 92) 小口明. 地域“親子読書会”の誕生とその実践. 子どもの本棚. 1973, vol. 2, no. 13, p. 16-17.
- 93) “一冊の本との出会い”. すわ18号. 諏訪市PTA 母親文庫運営委員会編. 1979, p. 54-55. 基本的に母親文庫の仲間内で読まれることを想定した媒体に掲載された文章であり、かつ、著者の私生活に触れる内容であることから、個人情報保護に配慮して著者名は伏せた。

要 旨

【目的】 長野県 PTA 母親文庫の活動の主眼は、母親自身の読み書きから母親による子どもへの読書推進へと変化しており、前者の活動は母親仲間や図書館員と、後者は子どもや小学校教師と行われる傾向にあった。だが、変化の詳細は不明である。本論は、①活動の変化の時期を特定すると共に、②各活動で母親文庫の参加者の立場や能力はどう位置づけられていたのか、③図書館員や小学校教師はどのように活動に関わっていたのか、の解明を目指す。

【方法】 まず、長野県図書館協会会報および母親文庫の全県組織の記録を分析し、文庫全体の活動内容の変化を概観する。次に、母親自身の読み書きを極めた「上田市 PTA 母親文庫創作グループ」に焦点化し、同グループの文集や助言者を務めた図書館員の著作物を分析する。更に、文庫での親子読書推進を主張した小学校教師の著作物を創作グループのそれと対比させつつ分析する。

【結果】 以下の3点を解明した。①母親文庫は1950～60年代には母親自身の読み書きを活動の主眼としていたが、60年代末～70年代に子どもへの読書推進をも志向し始め、80年代以降は活動の主眼を子どもへの読書推進に移した。②創作グループの助言者の図書館員、平野勝重は、文庫の参加者達を「新たな自己に目ざめ」ようとする人々と位置づけ、参加者達が読み書きにより自分のありかたを再認識することを目指した。一方、文庫での親子読書推進を主張した小学校教師、小口明は、参加者達をいわゆる母親と位置づけ、「母親」文庫の子ども抜き活動を批判した。③平野は参加者達と自分を共に「新たな自己に目ざめ」ようとする欲求に基づいて読み書きする者と位置づけ、欲求を満たす術を知る者として術を知らない参加者達に助言した。一方、小口は、自分を子ども一般への、参加者達を我が子への読書推進を行うべき者と位置づけ、母親である参加者こそが我が子に最適な形での読書推進ができると強調することで参加者達に親子読書を促した。

1954年(母親文庫部会初開催の年)～1959年の協議テーマ

- A: 母親文庫全体に関するテーマ
 - ・PTA母親文庫をどのように生活と結びつけて運営していったらよいか(59)
- B: 母親文庫の読書全体に関するテーマ
 - ・母親の読書をより一層生活の支えとなるような読書にするにはどうしたらよいか(59)
- C: 母親文庫の組織・運営に関するテーマ
 - C-1: 組織・運営全体
 - ・PTA母親文庫の成長をさらに上げる改良点について(54)
 - ・母親文庫の最も合理的な運営方策いかん(55)
 - C-2: 配本の発掘・方法
 - ・PTA母親文庫は学級PTA(学級組織)がよいか、部落PTA(部落組織)がよいか(54)(55)
 - ・PTA母親文庫の巡回を合理的に運営するにはいかなる組織がよいか(55)
 - ・この文庫の配本の方法はどのようなものにするにしようか(59)
 - ・長期にわたって貸出されている図書に対する処置いかん(56)
 - ・回覧図書の紛失を防ぐ方法と弁償代金の出どころについて(58)
 - ・配本をなるべく希望が一つ、二つの図書に集中しやすいつい点などからグループへの配本の適切な方法はないか(57)
 - ・配本図書が希望が一つ、二つの図書に集中しやすいつい点などからグループへの配本の適切な方法はないか(57)
 - ・利用団体の中で配本(グループへの割当)をどのようにしたら不平の出ないスムーズな運営にすることができるか(58)
 - C-3: 配本内容
 - ・PTA母親文庫図書の内容について(54)
 - ・良い本、悪い本の基準をどのように考えようか(58)
 - ・ベストセラーや新刊本ばかり選んで古典的なものを読む必要があると思うかその方向に運ぶためにどのようにしたらよいか(59)
 - C-4: 他の組織(図書館/学校/市区町村/婦人会)と母親文庫の関係
 - ・PTA母親文庫利用者の声配本所又は隣立図書館に聞かれるようにするにはどうしたらよいか(55)
 - ・PTA母親文庫と図書館との結びつきはどのようであるべきか(56)
 - ・学校が配本、回収の媒介所となる場合、教師の借鑑を防ぐ方法いかん(55)
 - ・この文庫の運営に学校や教師はどのように関係しているか、またどのように関係してもらったらよいか(59)
 - ・PTA母親文庫が各市区町村に及ぼした影響について(54)
 - ・町村台併とPTA母親文庫のあり方(57)
 - C-5: その他
 - ・PTA母親文庫を急速に全県に普及するために及ぼすためにはどんな方法があるか(54)
 - ・PTA母親文庫をより充実させるために、配本所を中心とした組織を作ることが望ましいが、その具体策いかん(55)
- D: 母親への読書の普及に関するテーマ
 - D-1: 読書の普及全体
 - なし
 - D-2: 全会員への文庫の普及等の原典
 - ・この文庫の趣旨、目的、貸出方法などを会員の一人一人にまで徹底せしめる方策(56)
 - ・全会員にこの文庫の趣旨を徹底させるにはどうしたらよいか(57)
 - D-3: 読書への理解の少ない家族(姑等)と共に読書できるようにする方法
 - ・PTA母親文庫を家族全員に読ませる方法について(54)
 - ・いかにしたらお母さんが、家庭円満裡に読書を好きになっていただければ(56)
 - ・読書に対して理解の少ない姑を理解させるにはどうしたらよいか(57)
 - ・この文庫の本は家庭の中でどのように読まれているか、またどのようにしたらよくなるか(59)
- E: 読書の普及に関するテーマ
 - E-1: 読書の普及全体
 - なし
 - E-2: 読書普及に関するテーマ
 - ・PTA母親文庫の読書普及を高めるためにはどうしたらよいか(55)
 - ・配本を奨励したり休んだりするPTAをどうするか(56)
 - ・会員中の不読者に対する働き方(56)
 - ・読書の意味や関心のうまいいかに意欲を起させるにはどうしたらよいか(57)
 - ・グループに加わっているが、読書意欲のない人などをどのようにしたらよいか(58)
 - ・読書意欲が衰退する原因はなにか、また意欲のないお母さんたちをどのように導いたらよいか(59)
 - ・へき地のお母さんに読書意欲を起させるにはどうしたらよいか(59)
 - E-3: 読書普及に関するテーマ
 - なし
 - E-4: 読書普及に関するテーマ
 - なし
 - E-5: 読書普及に関するテーマ
 - なし
 - E-6: その他
 - ・グループ中のレベル差をどのように解決したらよいか(57)
 - E: 読書の普及に関するテーマ
 - E-1: 読書普及に関するテーマ
 - ・配本された図書を効果的に利用するにはどうしたらよいか(55)
 - ・読書内容をより高めるための良書の推せん、読書会の運営、読後感想の処理などをどのようにしたらよいか(57)
 - E-2: 読後感想
 - ・読後の処理をどのようにしたらよいか(58)
 - ・本を読んだあとに感想はどのようにして書いたらよいか(59)
 - E-3: 書くこと
 - なし
 - E-4: 読書会
 - ・PTA母親文庫を利用して母親の読書会はどのように運営したらよいか(58)
 - ・PTAにおける読書会は固定メンバーがよいか、自由メンバーがよいか(59)
 - E-5: その他
 - なし
 - F: 子どもへの読書推進に関するテーマ
 - F-1: (母親と)子どもの読書
 - ・子供の教育と母親文庫との関係をどのようにしたらよいか(58)
 - F-2: 読み聞かせ
 - なし
 - F-3: その他
 - なし
 - G: テレビと読書に関するテーマ
 - なし
 - H: その他
 - なし
 - I: 合同部会
 - なし

「本を読む母親」達は誰と読んでいたのか

付録1：長野県図書館大会で母親文庫が運営した部会の協議テーマ 1)2)3) (続き)

1960年代の協議テーマ

- A: 母親文庫全体に関するテーマ
 - ・PTA母親文庫を前進させるためにどうしたらよいか(65)
 - ・PTA母親文庫発展のために(67)
- B: 母親文庫の読書全体に関するテーマ
 - ・読書法の問題について(この文庫をより効果的に活用するために)(60)
 - ・読書のありかたや方法について(61)
- C: 母親文庫の組織・運営に関するテーマ
 - OC-1: 組織・運営全体
 - ・PTA母親文庫の組織や運営上の問題について(60)
 - ・PTA母親文庫の組織および運営の問題について(62)
 - ・組織と運営のために(66)(67)
 - ・母親の読書活動一組織や運営上の問題一(69)
 - OC-2: 配本の経路・方法 なし
 - OC-3: 配本内容 なし
- OC-4: 他: 組織(図書館・学校・市区町村/婦人会)と母親文庫の関係
 - ・配本所への希望と、運営のものたい(61)
 - ・婦人会など、他団体と文庫の関係について(61)
 - ・(各校PTA役員と母親文庫会員の研究分科会)
 - ・PTA組織の中でPTA母親文庫はどのように位置づけられていますか。(65)
 - ・(各校PTA役員と母親文庫会員の研究分科会)
 - ・PTA母親文庫発展のために(PTA役員と母親文庫会員の話しあい)(66)
- D: 母親への読書の普及に関するテーマ
 - OD-1: 読書の普及全体
 - ・母親の読書をいっそう普及させるにはどうしたらよいか(62)
 - ・読書を広めるために(63)(66)(67)
 - OD-2: 全会員への文庫の普及等の周知 なし
 - OD-3: 読書への理解の少ない家族(姑等)と共に読書できるようにする方法
 - ・嫁と姑と仲よく読書に親しんでいる例はありませんか(64)
 - OD-4: 会員の読書意欲の維持・向上 なし
 - OD-5: 仕事や家事、育児と読書の両立
 - ・産家・商家などで仕事と読書をつまぐ調整している例はありませんか(64)
 - ・勤労婦人で読書に親しんでいる例はありませんか(64)
 - ・多忙な日常生活(仕事や家事)の中で、読書の時間をどう生み出していますか(65)
 - ・現代の生活の中における主婦の読書の諸問題について(62)
 - OD-6: その他 なし
- E: 母親の読書を深める活動に関するテーマ
 - OE-1: 読書を探める活動全体
 - ・母親の読書をいっそう深めるにはどうしたらよいか(62)
 - ・読書を探めるために(63)(66)(67)
 - OE-2: 読後感想 なし
 - OE-3: 書くこと
 - ・生活記録、らくがき書く活動について(61)
 - ・PTA母親文庫の文庫作成諸問題について(62)
 - ・読むことと書くこと(63)
 - OE-4: 読書会
 - ・読書会の運営一ひらき方、もち方一(69)
 - OE-5: その他
 - ・話しあいの会について(61)
 - F: 子どもへの読書推進に関するテーマ
 - OF-1: (母親と)子どもの読書
 - ・母親が読書をしたために子どもにより影響を与えた例はありませんか(64)
 - ・母親の読書が子どもの教育のためにどのように役立っていますか(65)
 - ・親子読書一その進め方一(69)
 - OF-2: 読み聞かせ なし
 - OF-3: その他 なし
 - G: テレビに関するテーマ
 - ・テレビなどマスコミと読書(63)
 - ・テレビと読書をうまく関連させている例はありませんか(64)
 - ・テレビと読書(69)
 - H: その他
 - ・読書から得た体験(69)
 - I: 合同部会
 - OI-1: PTA母親文庫部会、公民図書館、公民館図書館及び一般合同部会
 - ・子どもの読書一どう選んだらよいか一(68)
 - ・親子の読書について(68)
 - ・勤労青年と読書(68)
 - ・老人と読書(68)
 - ・読書会 開き方、もち方(68)
 - ・書くこと一読書感想文、生活記録(68)
 - ・私の生活記録一母としての生活反省から一(68)
 - ・読書から生れた体験(68)
 - ・PTA母親文庫の運営 (PTAの場合)(68)
 - ・PTA母親文庫の運営 (婦人会の場合)(68)
 - OI-2: 公民図書館、小中学校、母親の合同部会 なし
 - OI-3: 学校図書館、公民図書館、母親文庫の合同部会 なし

付録1：長野県図書館大会で母親文庫が運営した部会の協議テーマ 1)2)3) (続き)

1970年代の協議テーマ	
●A: 母親文庫全体に関するテーマ なし	
●B: 母親文庫の読書全体に関するテーマ なし	
●C: 母親文庫の組織・運営に関するテーマ	●F: 子どもへの読書推進に関するテーマ
OC-1: 組織・運営全体	OF-1: (母親と)子どもの読書
1. 組織と運営—ひろめていくのにはどうしたらよいか—(70)	・親と子の読書—そのあり方、すすめ方—(70)
2. 組織と運営—あり方と広め方—(71)	・親と子どもの読書—そのあり方、すすめ方—(72)(73)
3. 母親文庫の運営(78)	・児童図書と子どもの読書—そのすすめ方—(74)
OC-2: 配本の経路・方法 なし	・児童図書と子どもの読書(75)(78)
OC-3: 配本内容 なし	OF-2: 読み聞かせ なし
OC-4: 他の組織(図書館/学校/市区町村/婦人会)と母親文庫の関係 なし	OF-3: 子供への読書推進活動(親子読書、読み聞かせ以外) なし
OC-5その他 なし	
●D: 母親への読書の普及に関するテーマ	●G: テレビと読書に関するテーマ
OD-1: 読書の普及全体 なし	・読書とテレビ(70)(75)
OD-2: 全会員への文庫の趣旨等の周知 なし	・子ども読書とテレビ—そのあり方と方法—(71)
OD-3: 読書への理解の少ない家族(姑等)と共に読書できるような方法 なし	・テレビと読書(72)(73)
OD-4: 会員の読書意欲の維持・向上 なし	・テレビの長所・短所とその活用について(74)
OD-5: 仕事や家事、育児と読書の両立	・母親の読書とテレビ(76)(77)
・働く母親と読書—そのあり方・方法—(71)(74)	
・読書と生活—そのあり方・方法—(70)(72)(73)	●H: その他 なし
・母親の生活と読書(75)	●I: 合同部会 なし
・婦人の読書と生活(76)(77)(78)	
OD-6その他 なし	
●E: 母親の読書を促める活動に関するテーマ	
OE-1: 読書を深める活動全体 なし	
OE-2: 読後感想 なし	
OE-3: 書くこと	
・書くこと—読書感想文、文集、生活記録—(70)	
・書くこと—読書感想文、文集—(71)	
・書くこと(72)(73)(74)	
・文集と書くこと(76)(77)(78)	
OE-4: 読書会	
・読書会—そのひろき方、もち方—(70)(71)(72)(73)	
・読書会の開き方(74)	
・読書会(75)	
・母親文庫と読書会(76)(77)(78)	
OE-5: その他 なし	

付録1：長野県図書館大会で母親文庫が運営した部会の協議テーマ 1)2)3) (続き)

1980年代の協議テーマ

- A: 母親文庫全体に関するテーマ なし
- B: 母親文庫の読書全体に関するテーマ なし
- C: 母親文庫の組織・運営に関するテーマ
 - C-1: 組織・運営全体
 - ・母親文庫の運営(80)(82)(83)(84)(85)
 - ・運営(88)
 - ・母親文庫の運営について(89)
- C-2: 配本の経路・方法 なし
- C-3: 配本内容 なし
- C-4: 他の組織(図書館/学校/市区町村/婦人会)と母親文庫の関係 なし
- C-5: その他 なし
- D: 母親への読書の普及に関するテーマ
 - D-1: 読書の普及全体 なし
 - D-2: 全会員への文庫の贈呈等の周知 なし
 - D-3: 読書への理解の少ない家族(姉等)と共に読書できるようにする方法 なし
 - D-4: 会員の読書意欲の維持・向上 なし
- D-5: 仕事や家事、育児と読書の両立
 - ・婦人の読書と生活(80)(82)(83)(84)(85)
 - ・読書と生活(86)(87)(88)(89)
- D-6: その他 なし
- E: 母親の読書を深める活動に関するテーマ
 - E-1: 読書を深める活動全体 なし
 - E-2: 読後感想 なし
 - E-3: 書くこと
 - ・生活の中で書くこと(80)(82)(83)(84)(85)(86)(87)(88)(89)
 - E-4: 読書会
 - ・母親文庫と読書会(80)(82)(83)(84)(85)
 - ・読書会(86)(87)(88)(89)
 - E-5: その他 なし
- F: 子どもへの読書推進に関するテーマ
 - F-1: (母親と)子どもの読書
 - ・子供の読書と生活(80)(82)(83)(84)(85)(86)(87)(88)(89)
 - F-2: 読み聞かせ
 - ・読み聞かせ(85)(86)(87)(88)(89)
 - F-3: その他 なし
- G: テレビと読書に関するテーマ なし
- H: その他 なし
- I: 合同部会
 - I-1: PTA母親文庫部会、公共図書館、公民館図書館及び一般合同部会 なし
 - I-2: 公共図書館、小中学校、母親の合同部会
 - ・生涯読書と母親文庫のあり方—母親文庫を盛んにする為、地域図書館や学校はどんな役割を果たせばよいか(84)
 - I-3: 学校図書館、公共図書館、公民館図書館、母親文庫の合同部会 なし

付録1：長野県図書館大会で母親文庫が運営した部会の協議テーマ 1)2)3) (続き)

1990年代の協議テーマ

- A: 母親文庫全体に関するテーマ なし
- B: 母親文庫の読書全体に関するテーマ なし
- C: 母親文庫の組織・運営に関するテーマ なし
- D: 母親への読書の普及に関するテーマ
OD-1: 読書の普及全体 なし
- OD-2: 全会員への文庫の趣旨等の周知 なし
- OD-3: 読書への理解の少ない家族(妹等)と夫に読書できるようにする方法 なし
- OD-4: 会員の読書意欲の維持・向上 なし
- OD-5: 仕事や家事、育児と読書の両立
・読書と生活(90)(91)(92)(93)(94)(95)(96)(97)(98)(99)
- OD-6: その他 なし
- E: 母親の読書を深める活動に関するテーマ
OE-1: 読書を深める活動全体 なし
- OE-2: 読後感想 なし
- OE-3: 書くこと
・生活の中での書くこと(90)(91)(92)(93)(94)(95)(96)(97)(98)(99)
- OE-4: 読書会
・読書会(90)(91)(92)(93)(94)(95)(96)(97)(98)(99)
- OE-5: その他 なし
- F: 子どもへの読書推進に関するテーマ
OF-1: (母親と)子どもの読書
・子供の読書と生活(90)(91)(92)(93)(94)(95)(96)(97)(98)(99)
- OF-2: 読み聞かせ
・読み聞かせ(90)(91)(92)(93)(94)(95)(96)(97)(98)(99)
- OF-3: 子供への読書推進活動(親子読書、読み聞かせ以外) なし
- G: テレビと読書に関するテーマ なし
- H: その他 なし
- I: 合同部会
OI-1: PTA母親文庫部会、公共図書館、公民館図書館及び一般合同部会 なし
- OI-2: 公共図書館、小中学校、母親の合同部会 なし
- OI-3: 学校図書館、公共図書館、母親文庫の合同部会
・地域読書どう推進するか(92)
・読書活動はどう推進するか(93)
・母親文庫への取組み(94)(95)
・図書館承認選町の解用と図書館活性化のために(98)
・図書館承認選町の解用と図書館活性化のために(98)
・須坂市母親文庫の現状と課題(99)

付録1：長野県図書館大会で母親文庫が運営した部会の協議テーマ 1)2)3) (続き)

2000年～2013年(母親文庫部会の最終年)の協議テーマ

- A: 母親文庫全体に関するテーマ なし
- B: 母親文庫の読書全体に関するテーマ
 - ・読書すること(03)(04)
- C: 母親文庫の組織・運営に関するテーマ なし
- D: 母親への読書の普及に関するテーマ なし
- E: 母親の読書を深める活動に関するテーマ
 - OE-1: 読書を深める活動全体 なし
 - OE-2: 読後感想 なし
 - OE-3: 書くこと
 - ・(生活記録)縦手紙を通して(00)
 - ・(生活記録)生活の中での記録(01)
 - ・生活記録(02)
 - OE-4: 読書会
 - ・(フリーテーマ)1)文学鑑賞してみませんかー皆で「智恵子抄」を深く読み味わおう(00)
 - ・(読書会)今、南佐久はー6年目の読書会(00)
 - ・(フリーテーマ)1)子どもの目を通してー子どもたちの作文、詩より竹花初進先生のら話(01)
 - ・(読書会)本を通しておとよより楽しいひとときを過ごすために(01)
 - ・読書について「読み合わせと唱歌の世界へ」(05)
 - E-5: その他 なし
- F: 子どもへの読書推進に関するテーマ
 - OE-1: (母親と)子どもの読書
 - ・(親子読書)親子のふれあいを通して得られたかたけがえのないもの(00)
 - ・(親子読書)親子読書をしたいけれど…(01)
 - ・子どもともに読書する活動…親子読書会等の活動を通して(05)

- OF-2: 読み聞かせ
 - ・(読み聞かせ)お話会から学んだこと「本」が与えてくれたもの(00)
 - ・(フリーテーマⅡ)ハレルシアターをつくらう(01)
 - ・(読み聞かせ)OHHPの制作と上演(制作過程・上演方法・対象者等)(01)
 - ・読み聞かせとお話会(02)
 - ・読み聞かせとお話会等実践発表会(公開講座)(02)
 - ・読み聞かせの意義とおはなし会(03)(04)
 - ・読み聞かせボランティアのつづい(実践発表)(04)
 - ・読み聞かせボランティアの集い、読み聞かせの方法と実践を通してより効果的な読み聞かせのあり方を学ぶ(06)
 - ・読み聞かせの方法と実践発表を通して、より効果的な読み聞かせのあり方について学ぶ(05)(07)
 - ・子どもと本を結び活動、読み聞かせグループの実践を通して(06)(07)
 - ・実践発表を通して読み聞かせを学ぶ(08)
 - ・楽しいおはなし会にするには(09)
- OF-3: その他
 - ・子どもと本を結ぶ活動(02)(04)
 - ・子どもと本を結ぶ活動～佐久市親子文庫の活動から～(03)
 - ・ブックトークをやってみよう！～ボランティアによる学校でのブックトーク～(08)
 - ・子供の成長に合わせて本を選んでみよう～読書ボランティアとして～(10)
 - ・体験してみよう！ブックトーク(ワークショップ)(11)
 - ・子どもたちに読書の楽しさを伝えるために(実践発表と討論)(12)
 - ・みんなでやってみよう！絵本ではじまる学校応援団～上田市立南小学校の事例から～(事例紹介、質疑応答、実践発表、ワークショップ)(13)
- G: テレビと読書に関するテーマ なし
- H: その他
 - ・「四季の会」の活動を通して(05)
 - ・本との出会い、人との出会い～おはなしフェスティバルの開催を通して～(09)
 - ・幼児から大人まで様々な読書を楽しむ～ハレルシアター～中学生向け読み聞かせ・視覚障害者向け音訳～(実践発表)(11)
- I: 合同部会
 - OI-1: PTA母親文庫部会、公共図書館、公民館図書館及び一般合同部会 なし
 - OI-2: 公共図書館、小中学校、母親の合同部会 なし
 - OI-3: 学校図書館、公共図書館、母親文庫の合同部会
 - ・私たちの子どもへの贈り物ー県PTA母親文庫50周年・子ども読書年ー(00)
 - ・(母親文庫50年を経て、これからの課題)学校図書館・公共図書館・地域の星まし、連携のあり方(01)

1)以下の資料に掲載されたテーマを筆者が分類して作成。
 「長野県図書館協会会報」(1950年～2005年発行分)
 「長野県PTA母親文庫運営協議会」が発行した「長野県図書館・母親の読書部会」記録集(1970年～1998年発行分)、
 「長野県PTA母親文庫のあゆみ」(1999年～2003年発行分)、「あゆみ」(2004年～2014年発行分)
 2)基本的に分科会での協議テーマを記載したが、分科会ではなく班別の協議が行われた年(1954～58年、1961年、1962年、1964年、1965年)については各班のテーマを記載した。また、1978年と1981年は短期日程のため協議が行われなかった(全体会議のみ)のため、協議テーマはない。
 3)母親文庫が別の組織と合同で行った部会の協議テーマは、「●L: 合同部会」の分類で整理した。

「本を読む母親」達は誰と読んでいたのか

付録2: 長野県 PTA 母親文庫運営協議会主催の研修・地区公開講座のテーマ一覧

年度	研修・地区公開講座のテーマ(講師名)
	(子供への読書推進と関わりが強いと思われるテーマには 網掛 した)
1970	会議の持ち方(桜井彦郎)
1971	会議の持ち方(中村電子)
1972	同上
1973	同上
1974	同上
1975	同上
1976	同上
1977	「書くこと」日常生活に潤いを及ぼす書くこと(青木修二)
1978	「書くこと」感想を書く生活づくり(青木修二)
1979	「書くこと」書くことの力を高める読み(青木修二)
1980	「書くこと」生活を育てる書くこと(青木修二)
1981	「書くこと」母親の読書と書くこと(青木修二)
1982	「集団読書」近代日本文学の読み方と読書会の方法(東栄蔵)
1983	「集団読書」近代日本文学の読み方と集団読書の方法(東栄蔵)
1984	同上
1985	同上
1986	「読み聞かせ」読書と子どもたちのかかわり(小口明)
1987	同上
1988	同上
1989	「読書と人間形成」(毛涯章平)
1990	「子どもの読書・親の読書」(高橋忠治)
1991	「詩の世界に遊ぶ」(高橋忠治)
1992	「童話の世界に遊ぶ」(高橋忠治)
1993	「アンデルセンの世界」(高橋忠治)
1994	「小説を楽しむ: 井上靖『氷壁』のロマン」(堀井正子)
1995	「小説を楽しむ: 女と家と網物語」(堀井正子)
1996	「異空間経井沢: これは不思議な文学世界」(堀井正子)
1997	「本の中の教師たち: 子どもに愛され、子どもを愛した白樺教師」(堀井正子)
1998	「童心の世界に学ぶ」(羽生田敏)
1999	「昔話からのメッセージ」(羽生田敏)
2000	「いのちある言葉—こぼで心を育む—」(美咲蘭)
2001	「童話を書きつつ考えたこと」(和田登)
2002	「今いちばん語りたいこと—自作にふれながら—」(和田登)
2003	いっしょにやりましょう。「読み聞かせ!」—読み聞かせの実演—(牛山圭吾・牛山貞世)
2004	いっしょにやりましょう。「読み聞かせ!」—お父さんもいっしょに—読み聞かせの実演—(牛山圭吾・牛山貞世)
2005	「人と本と自然と—子どもたちのすこやかな未来のために—」(松岡達英・佐藤月子)
2006	「現在(いま)、子どもたちが求めているもの—子どもの成長と物語—」(斎藤惇夫・佐藤月子)
2007	「人生のポート—本と一緒に成長する—」(エムナマエ・下沢洋子)
2008	「心をつなぐ読みかき」(越高一夫)
2009	「絵本であそぼ! ~お父さんも子育てを楽しんじゃおう~」(安藤哲也)
2010	「子育てハッピーアドバイス~絵本でコミュニケーション~」(明橋大二) 「竹内通雅の絵本術~ギター抱えて読み聞かせ」(竹内通雅)
2011	「あきやまたし絵本ライブinながの」(あきやまたし)
2012	「長谷川義史絵本ライブinながの」(長谷川義史)
2013	「川端誠 絵本ライブ&講演会」(川端誠)

以下の情報をもとに筆者が作成。

「長野県 PTA 母親文庫運営協議会」が発行した「長野県図書館大会『母親の読書部会』記録集」(1970年~1998年発行分)

および「長野県 PTA 母親文庫のあゆみ」(1999年~2003年発行分), 「あゆみ」(2004年~2014年発行分)

上記資料によれば、研修・地区公開講座は、1970年~2002年と2004年は県下4か所で、2003年は県下3か所で、2005年~2009年は県下2か所で、2010年~2013年は県下1か所で母親文庫参加者を受講対象に開催された。また、2010年~2013年は参加者の子どもも受講対象としている。